
無の片鱗

タクミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無の片鱗

【Nコード】

N2145N

【作者名】

タクミン

【あらすじ】

今日は彼女と彼女のお兄さんと一緒にピクニックで楽しい思い出を増やすはずだった・・・なのに突如現われた謎の光る手に二人をさらわれてしまった！！助けようと追いかけた先は、魔法の飛び交う別世界で、しかも彼女でもないヤツにファーストキスを奪われた！？

はじめまして、タクミンです^^初心者で未熟ですが、どうかよろしく願います^^

プロローグ（前書き）

はじめまして、タクミンです！！！
受験生なのであまり更新できないかもしれませんが、よろしくおね
がいします^^

プロローグ

優しき炎。あらゆる人の上に立ち、敵をも救わん。

勝負の風。あらゆる賭けに勝利を収めん。

無情なる雷。あらゆる邪を斬り捨てん。

破戒の土。あらゆる物を壊し、戒めん。

華美なる水。あらゆる非を悔い、改めん。

選別の光。あらゆることを選び、愛さん。

断罪の闇。あらゆる悪を裁き、罪を与えん。

我、この七の片鱗と無を持ちいて聖地を邪鬼より取り戻さん。

我、七の片鱗を散りばめん。我、無を七つに分けてこの地に残さん。

再び七の片鱗、無、集まりし時、再び力目覚めん・・・

？ 彼女×ピクニック＝手

黒side

「はい、黒さんお弁当をどうぞ」

そう言いながらシンプルな風呂敷に包んであるお弁当箱を渡してくれたのはおれの彼女、あまね むつ天音夢羽だ。

おれたちは付き合い始めて一年、二回目のピクニックに来ている。まあリア充の仲間入りは果たしたということだ。

きれいな銀髪の美少女の笑顔は空高くにある太陽よりも輝いていた。

「本当におれもついてきてよかったのか？」

「何言ってますか、お義兄さん」

本日同じせりふを8回繰り返しているこの人は夢羽の三つ上、十九歳あまね たつやの天音龍也さんだ。

ピクニックには前も誘ったのだが、ついてきてくれたのは今回が初めてだ。

おれてきには龍也さんはおれに天音流剣術を教えてくれた兄弟子だから一緒にいろんな思い出を作りたいと思っているんだけだな。

この二人は家族を亡くしたおれを立ち直らせてくれた人たちだ。

そして本当の家族のように接してくれる大切な人。

夢羽はもちろん、いつか龍也さんも守れるくらい強くなりたいと思
っている。

「そんじゃあおれ、ちょっとトイレいつてきます」
そういつたときだった。

地面が盛り上がり、光り輝く大きな手が出てきた。

その手はちょうどおれの反対側にあつたため夢羽と龍也さんを捕ら
える。

「夢羽！！お義兄さ「来るな！！！」」

駆け出していたおれの足はお義兄さんの声によって止められる。

「黒くん！大人を呼んで来い！君一人では無理・・・」

全部言い終わらないうちに二人を束縛している手は地面に戻ってい
った。ポツカリ大きな穴があいている。

「それは無理な頼みです、お義兄さん」

おれは穴の中に飛び込み、落ちていった・・・

？ 美少女×キスⅡ異世界

黒side

「・・・つと！おきな・・・」

・・・

ここはどこだ？

「・・・きなさいってば！」

・・・ああ、そうだ。夢羽とお義兄さんを助けなきゃ。

「起きなさいって言うてるでしょ！！！」

「ぐはっ！」

腹に強い衝撃を感じ、目を開ける。

するとそこには金髪をツインテールにした背の低い女の子が若干不満そうに仁王立ちしていた。

「まったく・・・で？あんた何？」

は？初対面の人間に何言ってるんだ？こいつは？

「何って・・・人間」

「最悪！死ね！」

そういうやいなや彼女のけりが再びおれの腹に直撃する。

「やゝい！ヒスイ・エクセラの魂獣^{こんじゅう}は平民だゝ」

「やつぱだめだったか」

「ナワエ・ミウリュと同じだ！」

飛び交う侮蔑の言葉にヒスイ・エクセラというらしい少女が反論する。

「ちょっと失敗しただけよ！あとあんな落ちこぼれと一緒にしないで！」

よくみると周りにはまるで映画に出てくるような魔法使いの格好をした同い年くらいの少年少女がたくさんいた。

・・・なに、こいつら。コスプレか？

「こら！ミス・エクセラ！先輩を落ちこぼれとはなんですか！みんなも同級生を馬鹿にしてはいけません！」

そのなかから中年の頭の毛がさびしい男の人が出てきた。

この様子からすると先生なのだろう。

「すみません・・・でもこんな平民なんてイヤです！もう一度やらせてください！」

オイ、平民っておれのことか。

「それはなりません。この春の魂獣召喚の儀式は神聖なものです。それに『ソウル・サモン』は一度使くと魂獣が死ぬまで使えないことぐらい知っているますよね。」

「はぁい・・・」

「わかったならはやく契約をおこなってください」

「えゝ彼と？」

「そうです。例外はありませんよ」

しぶしぶといった表情でうなずいた後、おれをけりやがった少女、ヒスイはおれに向き直り目の前に立った。

頭のとっぺんがおれの胸くらいまでしかない。

「ちょっとしゃがみなさい！」

「なんだその上から目線の言い方は？ちっちゃいくせに」

ボソツといったらまたけられた。その衝撃でおれは座り込む。

「貴族にこんなことされるなんて平民じゃ一生ないんだからね！」

なにが貴族だ。この暴力女。

ヒスイは杖らしきものを振り上げ、何かを唱え始めた。

「汝、我の魂なり

汝は我を守り、敬い、従うべし
今、契りを交わそうぞ・・・」

そういうとヒスイはいきなりおれの唇に自分のそれを押し付けてきた。

なんだか体が熱くなっていくようだった。

・・・っていうか熱っ！！！！

比喻表現じゃなくてほんとに熱い！！！！

特に熱く感じている右手の甲を見ると見たことのない文字が刻まれていた。

「はあ・・・これでいいですよね、クルムーン先生」

「はい、よく出来ましたねミス・エクセラ。でもこのルーンは見たことのない形ですね・・・」

「ちょっと待て。なんだ今のは！！！！」

おれのファーストキス！！まだ夢羽ともしてないのに！！！！

「うっさいわね、平民のくせに」

「平民じゃねえ、おれは柳川黒だ」
やなくかわくろ

「知らないわよ・・・まあいいわ。説明してあげる」

ヒスィside

「今のは無属性の魔法『ソウル・サモン』召喚系魔法の一種で自分の魂の波長と一番シンクロする魂をもったモンスターを呼び出し

契約を交わすことで自らの魂獣となり、一生をともにする」

教科書に書いてあった文をまるつきし棒読みだけど平民にはコレで十分よね。

「だからって何でキスすんだよって意味！初めてだったんだぞ！！」

ッ――――！

この魂獣はなんてデリカシーがないのかしら！

「あれも契約に必要だったんだから仕方ないじゃない！わたしだってファーストキスだったんだからね！」

ドガッ！

そんな擬音語が似合うけりを平民の腹にぶちあたる。

ふゝ、やっぱなにかをけると落ち着くわね

「・・・まあそれはいいや。おれはここじゃないところから来たんだが？」

「ああ、距離は別に関係ないのよ」

すると平民は立ち上がって真剣な顔で迫ってきた。

「それじゃあ、あの手もお前の仕業か！！！！！」

すごい剣幕だったから思わず後ずさってしまふ。

何よ、手って？面倒くさいわね、コイツ。

「知らないわよそんなの。だいたい『ソウル・サモン』は手なんてださないわ」

平民はがっかりした顔で再び座り込んだ。

「じゃあここはどこなんだ？」

ああもう！ほんつとくに面倒くさい！

「ここはベルフレム魔法学園よ・・・」

「・・・は？魔法？何お前、電波系？」

言ってることが意味不明だったけど、バカにしていることはわかったからけっしておく。

すると平民はいもむしみたいになってしまった。

・・・にしてもむかつくわね、コイツ。平民のくせに！

どんな罰をあたえてやろうかしら・・・

そんなことを思っていると視界にゴーレムがいた。

・・・そうね。

「そのゴーレムの主人は誰？」

「ぼくだが？」

金髪を短めに切った、おそらく美男子に分類されるであろう生徒が名乗り出てきた。

うわ、たしかこいつ人を馬鹿にした態度で有名なやつだ。

まあ、こいつでいいか。

「それじゃあダニエル・ウーロン。あんたに決闘を申し込むわ。」

ふふふ・・・平民の分際でわたしをバカにしたことを後悔させてあげるわ。

？ 美少女×キスⅡ異世界（後書き）

いろいろ急展開です。でもヒスイはどうやって黒くんにお仕置きするつもりなのでしょう？なるべく早く更新できるようがんばります

^^

？ 決闘×ゴレムⅡ最強！？（前書き）

結構早く更新できました^^

？ 決闘×ゴーレムⅡ最強！？

黒side

・・・だめだ。コイツの話はよくわからん。すぐけるし。

あとであのクルムーン先生とか言う人に聞いてみよう。

「それじゃあダニエル・ウーロン。あんたに決闘を申し込むわ」

？何言ってるんだコイツ。決闘って魔法でも打ち合うのか？

ちなみにおれはヒスイの言うことを信じることにした。

というのも元いた世界での中学校がなんでもありのめちゃくちゃな学校だったからだ。

普通の人ならパニックに陥るのに平然としているのもデンジャラスな学校生活をおくっていたせいである。

まあこの話はまた別の機会に・・・

人間なんでも適応能力が大事だぜ？

「あ、だけど魂獣同士の決闘ね」

「まあいいよ、ぼくは心が広いからね。おいでグレタス」

ダニエル・ウーロンだっけ？そいつがそう言つとド。クエにでてくるようなゴーレムが歩み出てきた。

けっこうでつけえなあゝ・・・ホラ、適応してるからもう驚かないぞ。

・・・ん？今ヒスイ、魂獣同士って言ったよな？

この決闘はヒスイとダニエルの決闘だろ？

ヒスイの魂獣はおれだよな？そんでダニエルの魂獣はあのゴーレム・
・

・・・っておい！おれがあゝのゴーレムと闘うって事か！？これには
適応できない！！！！

「ちょっと待てヒスイ！！死ぬぞ、これ！！！！」

「そっちのほうが一番いいじゃない。もう一回『ソウル・サモン』
使えるんだし」

勝手に呼び出して、そして死ぬだと？自分勝手にもほどがある。

しかしおれの心情などおかまいなしというようにグレタス（ゴーレム）は拳を振り上げ、おろしてきた。

やっべー！

必死で走ってかわす。

グレタスが拳を上げるとそこには地面にくつきりと拳の形の穴が
いていた。

背中に悪寒がはしる。

・・・これシャレにならねえぞ？

また自分に向けられる。

しばらくよけていたが、グレタスがつくった拳型の穴にひっかかり
転んでしまった。

やばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばいやばい
やばいやばいやばい！！！！！！

おれの中で危険信号がなり続ける中、グレタスがここぞとばかりに
攻撃をしかけてきた。

「こんなとこで死ぬるか――！！！！！！！！」

ダメもとで両手を前に突き出したとき、拳が振り下ろされた。

思わず目をつぶる。

・・・あれ？

どこも痛くねえぞ？

グレタスのやろう攻撃をやめたのか？

目を開ける。

それでグレタスは別に攻撃をやめたわけでも寸止めしたわけでもないことがわかった。

おれが突き出していた両の手がグレタスの拳をいとも簡単に受け止めていたのだ。

力なんて微塵も入れてないのに、だ。

ためしに拳を下にはらってみる。

するとグレタスの拳は地面深くにめり込んだ。

・・・すぐくね？おれ。

調子に乗ったおれは地面にささったままのグレタスの腕をとり、思いつきり投げてみた。

「オオオオオオッ！！？？」

グレタスは大声を上げながら約五百メートルほど先にぶつとんだ。

みんな驚いているのがわかる。

おれはさっきとは違う意味でやばいと感じていた。

？ 決闘×ゴーレムⅡ最強！？（後書き）

タ「どうも、最近友達に避けられてる気がしてならないタクミンです。今回からゲストを呼んでいきたいとおもいます。記念すべき最初のゲストは・・・」

ヒ「ヒスイ・エクセラよ。仕方ないから来てあげたわよ」

ク「柳川黒もいるぜ」

タ「というわけで物語の主人公とメインヒロインをお呼びしました
^^」

ヒ「っていうか平民！あんたなんであんなに強いのよ！罰にならないでしょ！」

ク「黒だ！・・・しらねえよおれも！逆切れすんな！」

ヒ「うつさい！死ね！！！」

ク「ぐはっ」

タ「うわゝ、ヒスイ、今は痛いよ・・・」

ヒ「いいのよ。こんぐらいししないとしつけにならないわ」

タ「哀れなり、クロ・・・まあいいや。ヒスイ、クロ、お前らの名前の由来知ってる？」

ヒ「さあ？でもさぞ高貴な由来なのでしょうね」

ク「そういやしらねえな・・・おれはなんなんだ、タクミン」

タ「クロははつきりいうと仲のいい友達の名前からとりました！まあ許可はとつてあるし、本名じゃないから問題ないぜ！！！」

ク「ほおゝ友情を感じるなあ」

タ「ま、本人に似せる気まったくないけど」

タ（今頃その友達は怒っているだろう・・・）

ヒ「ふゝん、じゃあわたしは？」

タ「ああ、ヒスイってのは塾の合宿の帰りのバスで翡翠色^{ひすい}の屋根をみたから。エクセラってのはおれの好きなゲーム『ロックマン・エグゼ』のエクゼをいじくっただけ」

ヒ「・・・それだけ？」

タ「うん、これだけ」

ヒ「死ね！！！！」

ドゲシッ！

ク「・・・おい、タクミンをけるなよ・・・仮にも作者様なんだからさ」

ヒ「そんなのかんけないわ、この名前結構気に入ってたんだからね！！！！」

タ「（・・・今のはもしやツンデレ？）そ、それでは次回予告です。なぜかめちやくちや強かったクロ。今度はその主人、ヒスイ・エクセラの実力が明らかにあります！！お楽しみに」

？ 授業×魔法〃落ちこぼれ（前書き）

さくたんさん、宣伝ありがとうございます^^
コレを見ているみなさんもぜひさくたんさんの「STAGE OF」
も読んでみてくださいね！！

？ 授業×魔法Ⅱ落ちこぼれ

ヒスィside

「アンタ本当にただの平民なの？」

「ああそうだ。おれはただの高校一年生、身長178・9cm、体重62kgの柳川黒だ」

プロフィールは聞いてないわよバカ。

でもさっきのは本当に驚いた。

さすがに死なせるつもりはなかったが、ボコボコになると思っていたのに。

「人間の魂獣はおれだけなのか？」

あんたほど強くないけどね。一人いるわよ、変なのが。

「一人いるわ。ナワエ・ミウリュっていう先輩のが」

実際あったことないけどかなりの落ちこぼれらしい。

あんたが人間の魂獣出したから、あたしまでバカにされるんじゃない！

たしかクースネダ校から転入してきたんだっただかしら・・・

あ、そろそろ授業の時間ね。

「それじゃあ平民、わたし授業行くから」

「わかった。それとおれの名前は黒だ」

どうでもいいわよ、そんなこと。

スタスタスタ・・・

スタスタスタ・・・

「なんつでついてくんのよー！ー！！！」

「ぐっは！」

何回わたしを怒らせたら気が済むのかしら。

「何でけるんだよ！」

「なんでついてくんのよー！」

「だって授業なんだろ！！！」

・・・はい？コイツ、授業受ける気だったの？

「あんたは魂獣なんだから授業に出れるわけないでしょ！？外にでも行つてなさいよ！！！」

もう一度けりをかまし、わたしは気を取り直して授業に向かった。

黒side

「ちくしょーいつてーな」

さっきヒスイにけられた腹がまだ痛む。

つーかおかしいだろ・・・

グレタスの拳だって痛くも痒くもなかったのに・・・

もしかしていろいろ制限があんのかなあ、この力。

そんなことを考えながらヒスイに言われたとおり学園の中庭を歩いていた。

早く夢羽と龍也さんを探さなきゃいけないんだけど、何のあてもなく探し回るほどバカじゃない。

まずは信用できそうな大人に事情を説明して協力してもらわないと・・・

だけど今は授業中らしいし、することがないのでこうしてブラブラしているのだ。

「おい、魂獣のきみ」

ん？おれか？

振り返るとダニエルとあと二人いた。

一人はメガネをかけたインテリ形のチビ。

もう一人はポテチ？みたいなおかしの袋を持っているぼっちゃり系のやつだ。

あれ？今授業中じゃなかったっけ？

「さっきはよくもやってくれたねえ。おかげでぼくのグレタスが全治一ヶ月の怪我を負ってしまったよ！！」

妙にリアリティあるな、ファンタジーのくせに。

「ああわるかつ」というわけで仇討ちにきたわけです」

インテリが言った。

・・・え？マジ？

ヒスィside

今はイーストー先生の授業を受けている。

イーストー先生はBランクの魔法使いだ。（タ「魔法についてはあとがきで先生方が懇切丁寧に説明してくれているからそっちも見てね」）

まあ学園の先生は優秀じゃないといけなからそれくらいは普通なのだろう。

ちなみにイーストー先生の得意系統は火だ。

「ではみなさん、教科書P30の『スネーク・ファイア』をやってみてください。中等部の時に出来るようになっていと思います
が、基本は大事ですからね」

先生がそういった途端、わたしのまわりの生徒がいつせいにわたしから離れ、無属性魔法『バリア』を唱えていた。

- - - - - !

怒りがこみ上げてくる。

半分やけくそになって荒く『スネーク・ファイア』のスペルを詠唱する。

そして杖を勢いよく振り下ろし

「『スネーク・ファイア』！」

バガア~~~~ン!!!!

わたしの辺り一帯が爆発した。

元々『スネーク・ファイア』は炎を鞭状に発生させる、火属性の簡単な魔法だ。

間違っても成功して爆発を起こすものではない。

しかしわたしの場合、属性付きの魔法を使おうとするとたいてい爆発してしまう。

ようするにわたし、ヒスイ・エクセラは魔法が苦手なのだった・・・

？ 授業×魔法Ⅱ落ちこぼれ（後書き）

タ「こんにちわ、家のエアコンがぶっ壊れて熱中症になってしまい
そんなタクミンです。今回のゲストは・・・」

クル「こんにちわ、ベレフムル魔法学園闇属性魔法担当兼教頭のク
ルムーンです」

イ「同じく火属性魔法担当のイーストです」

タ「はい、みなさんコイツラ誰？って顔してますね、影は薄いけど
れっきとした教師です。今回はこの人たちに魔法について教えても
らおうと思います（本編でタイミング失っちゃったからね）」

クル「影が薄いつていうのは気に入りませんがまあいいです。では
わたしからは魔法属性の紹介を

火、主に破壊を得意とする系統

風、主に切り裂くことを得意とする系統

雷、主に一瞬での攻撃を得意とする系統

土、主に鍊金を得意とする系統

水、主に再生を得意とする系統

光、主に目くらましなどを得意とする系統

闇、主に呪いなど得意とする系統

・・・とまあこんな感じです。戦闘にしか使えないみたいな言い方
をしました、日常生活でも大いに使われていますよ。むしろそっ
ちの方が今の時代にはあっていますね。」

イ「では私からはランクについて

Eランク・・・無属性しか使えない

Dランク・・・1つしか属性つき魔法を使えない

Cランク・・・2つ属性つき魔法を使える

Bランク・・・3つ属性つき魔法を使える

Aランク・・・4つ属性つき魔法を使える

Sランク・・・5つ以上属性つき魔法を使える

属性つき魔法を多く使えると、それぞれの魔法が強化されます。

例として

Dランク 火、威力1だったのがCランクになると・・・

火、威力2 水、威力2

というように全体的に能力があがります」

タ「ありがとうございます・・・はあ、長かった（わかりやすかったでしょうか？）では次回予告です！ヒスイの魔法不得意が発覚しました。ではクロとダニエルのリターンマッチ。どうなることやら（笑）お楽しみに」

？ イジメ×先輩〃友達（前書き）

遅れて申し訳ありませんm（――）m
同時進行で「なんでもない少年と神である少女のとんでもない学校生活」も書いてますのでそちらもよろしく願いします^^

？ イジメ×先輩〃友達

黒side

現在おれ、柳川黒はいわゆるイジメというものを受けている。

ダニエルとその子分に魔法の集中攻撃されているのだ。

「『ストーン・ハンド』！」

ダニエルが出した土で出来た手をおれはハエでもはらうようにして壊した。

「くそつ、レオナンド、『ストーム』を。ルイは『スネーク・ファイア』だ」

するとぽつちやりのほうからすごい風が吹いてきて中庭の草花が飛ばされる。

しかしおれにはそよ風にしか感じられなかった。

今度はメガネのほうで炎の鞭みたいなものを飛ばしてきた。

しかしこれもおれにあたった瞬間に跳ね返り、消えてしまった。

なるほど。ぽつちやりがレオナンドでメガネがルイか・・・

三人を見るとみんな啞然とした表情だった。

十数秒たってからダニエルがようやく口をひらいた。

「きみ・・・ほんとに人間かね？」

失礼だねコノヤロウ。

「ああ、そうだ。おれはただの高校一年生、身長178・9cm、体重62kgの柳川黒だ」

ヒスイに説明したときと同じ簡易プロフィールを告げる。

「しかしその身体能力は邪鬼^{じゃき}にしか思えん」

？邪鬼って何だ？

「おい、なんだそのじゃ」「コラ！あなたたち何をしているの！！」

おれの疑問は突然現れた見知らぬ先生の怒声によってさえぎられた。

「あなたたち、先生の許可もなしに学園内で魔法を攻撃に使いましたね？」

・・・おれは使ってないし、いいよな？

「でも先生、あいつがいけないんです！」

オイ、ダニエル！お前が一方的に悪いだろ！！

「あれは魂獣です。しかも今日呼び出されたばかりです。それをいじめるとはそれでも貴族ですか！！！」

・・・人間扱いされなかったことに少し腹がたつけど・・・なんかラッキ〜

夢羽たちのことも聞けたらよかったのだがさわらぬ神にたたりなし。

おれはその場を立ち去った。

ダニエル side

「くそ、むかつく。なんでアイツだけ」

あの後小一時間ほど怒られた。あの先生の説教は無駄に長い。

「んじゃあさ、次はどうするの?」

おかしを食べながら隣を歩いているレオナンドが尋ねてきた。

「待ち伏せするとか?」

・・・ダメだな。

「そんなことアイツには関係ないだろう」

アイツは人間のくせに邪鬼と同等か、それ以上の力をもっている。

みたところ魔法は使えなかったみたいだが。

・・・ああもう！イライラするなあ！

グレタスの仇は討ちたいが、僕らではどうにもできそうにない。

思わず足元にあった小石を蹴り上げる。

すると前方に歩いていた人の額に当たってしまった。

しかもガラの悪そうな先輩に。

「オイ、イテーなゴルア!!!!」

周りを見るとさらに四人くらい素行の悪そうな先輩がいた。

黒side

「はははははは!!!!」

やべえ、笑いがとまんねえwwww

「ヒスイ、お前魔法使いのくせに魔法が使えねえのかよ」

廊下でおれとおなじようにたくさんの生徒がクスクス笑っている。

「うつさいわね、平民の分際でバカにしないで」

「ぐはっ」

なんだかけられることに慣れてきた自分が怖い。

「無属性の魔法は完璧なのよ。その無属性の『ソウル・サモン』であんたみたいな平民呼んじやったけど、ね!」

けりが来ることを予想したおれはとっさに腹を庇う。

しかし予想に反し、けりは顔にきた。

くそ、パターン変えやがって。

顔を抑えながら起き上がると多くの生徒が中庭を見ていることに気づいた。

「なになに、どうしたの？」

「なんかダニエルたちが先輩にけんか売っちゃってタコ殴りにされてるみたいだよ」

生徒たちの会話を盗み聞きしているとそんな話しが聞こえてきた。

「だいたいわたしは魔法が出来ないんじゃないじゃなくて苦手……ってちよつと!？」

ヒスイの話を無視しておれは三回であるのにもかかわらず、廊下の強化ガラスをぶち破り

中庭へと飛び降りた。

ダニエル side

全身が痛い……。ああ、みんな見てみぬふりかね……

そりゃ曰ころ偉そうにしていたからねえ・・・罰があたつたんだろ
う。

パリン

どこかでガラスが割れた音がする。

先輩たちも暴力の手を休め、音のしたほうに振り向く。

そこにはあの魂獣の少年が立っていた。

「はぁ・・・どの時代にもこんなクズがいるんだなあ・・・」

初対面の人間に対し、間違いなく最悪の部類に入る態度だった。

先輩たちが奇怪なものを見る目からみるみる怒っていくのがわかった。

「んだデメエは！」

しかし先輩の拳はいとも簡単に受け止められる。

「んなつ!?!」

「弱えなあ、お前ら。心も体も」

そついうと彼は先輩の腹をなぐった。

先輩はふつとんで中庭の噴水に落ちた。

「うあ・・・に、にげる！」

残りの先輩はさっきまでの勢いはどこにいったのかと思うほど情けない逃げ方をしていた。

・・・・・・

沈黙の時間・・・

少し立つてからようやく口を開くことが出来た。

「きみ・・・あの人大丈夫かね？」

先輩は噴水の中から一向に出てこない。浅いからおぼれてはいないだろうが。

・・・死んではないだろうね？

「ああ、大丈夫だと思うぜ。腹の10cmくらい前で寸止めたから」

ということは拳の風圧だけで先輩はふつとんだということかね！？

なるほど、よく見てみると噴水でときたまピクピク痙攣しているから死んではないようだね。

「んじゃあな」「まってくれ!」「ん?」

「・・・なぜぼくたちを助けてくれたんだい?」

別に、助けてくれなくてもよかったと思っているわけじゃない。

ついさつき、ぼくらは君をボコボコにしようとしていたんだぞ?

「はっ!質問の意味がわかんねえよ。」

人を助けんのに敵も味方もかんけえねえだろ」

・・・ぼくには彼がとてもかつこよく見えた。

「きみ、名前を教えてはくれんかね?」

「黒、柳川黒だよ」

なんとも言っているのにとクロは少し困り顔だった。

「クロ、ぼくと友達になっではくれんかね?」

クロについていけば、ぼくは変わる気がした。

??? side

三階から中庭の騒動の一部始終を見ていた視線がふたつ。

「ふん、やるやんあいつ。もしかしたら自分と同類なのかもしれへんね」

「そ、そうですね。でもそうだとしたら・・・」

「せやね、なるべく早くあいさつにいかねあかね」

あかねわ・・・ニヤニヤが止まらんわ。

あいつは、どんな人間なんやろうな・・・

そして、運命は流転する・・・

？ イジメ×先輩Ⅱ友達（後書き）

タ「こんにちわ、ハングル文字がプリントされているＴシャツが
気に入りのタクミンです^^今回のゲストは」

龍「天音龍也と」

ム「天音夢羽です」

タ「というわけで謎の手によって連れ去られた天音兄妹です」

龍「いやな言い方をしないでくれ」

ム「そういえばタクミンさん。わたしたちはどこにいますか？」

タ「ごめんだけど、それはまだいえないなあ・・・」

龍「それはそうと黒くんは何をしているんだ。夢羽より先にこの
馬の骨とも知れない女とキスなんかして」

タ「（ヒスイが聞いたらけりそうだな・・・）そんなに怒らないで
くれ、契約だったんだから」

ム「グスツ、黒さんのバカ・・・」

タ「夢羽も泣かないで！？ちゃんとふたりともいつか出すから！！」

龍&ム「・・・・・・・・・・」

タ「ああもう、ごめんなさい！なるべく早く出しますから！！そ、
それでは次回予告ですっ」

龍&ム「（ごまかしたな・・・）

タ「結果ダニエルたちとクロはお友達になることができました^^
よかったね^^そして最後に出てきた謎の影！！こいつによってク
ロたちの運命はおおしく流転します！！次回はそこまで出番はない
けどね お楽しみに！！」

？ 学園長×呼び出し＝伝説の魂獣（前書き）

遅くなりましたm（――）m
でわどうぞ^^

？ 学園長×呼び出し＝伝説の魂獣

クロside

友達・・・か。

もといた世界ではまともな友達がいなかったせいかな、おれはかなり上機嫌だった。

キンコーンカーンコーン

時計塔の鐘になる。

授業がすべて終わったという合図だ。

どこの世界も鐘の音は一緒なんだな

おれはちょうどヒスイのいる教室の前にいたのですぐにヒスイを見つける。

「あ、いたいた。ヒスイ、聞いて「地獄に落ちろ！！！」

いきなりけられた。ひどい！

「いきなりなんだよ！おれなんかしたか！？」

せっかく友達が出来たからそのうれしさを分けてやろうとしたのに！

「あんたがガラス割って、先輩をボコボコにしちゃったから主人のあたしが怒られたのよ！？おかしくない！？」

だからっておれをけるのもおかしいと思う。

「おれ、まちがったことしてないぞ！？」

おれは当たり前のことをしたまでだ！

「そんなことは関係ないのよ。重要なのはなんであたしがあんたのせいで怒られなきゃいけないの？ってこと！」

またけられた。理不尽すぎる。

「ピーンポーンパーンポーン

ミス・エクセラ。魂獣をつれて支給学園長室まできなさい。

ミス・エクセラ。魂獣をつれて支給学園長室まできなさい。」

・・・

シュツ！

「かわすな！」

「けんな！」

やつぱりきたよけりが。しかも今度はシュツ！なんていつてたぞ！？

ヒスイの性別を疑うおれであった。

「失礼します。ヒスイ・エクセラです。遅れて申し訳ありません」
ぜってえーそんなこと思っ^てないだろお前。

「入りなさい」

優しい女の人^の声がする。

中に入るとクルムーン先生と、あと二人いた。

おそらく、いすに座っている人が学園長先生なのだろう。貫禄がある。

あの書類を抱えている優しいお姉さんって感じのする人は秘書かな？

「あの・・・本当にすみませんでした。これからはちゃんと気をつけさせますから！」

うん、ヒスイ、おれもちゃんと謝るから頭を思いっきり床に叩き付けないでくれないかな？

めちゃくちゃ痛いんですけど。

しかし先生たちはみんなきょんとして、それから笑いを押し殺すようにして言った。

「ミス・エクセラ、何も怒るつもりで呼んだわけじゃないのよ」

「え？どうゆうことですか、アン先生？」

秘書のほうはアン先生というらしい。日本人っぽいな。

「フオフオフォ、ガラスを割った程度でこのオズマン、学園長室まで呼び出すほど心は狭くはないぞ。

友達を助けるためじゃったんじやろ？わしならむしろほめるわ。
いや、少し・・・いや、かなり重要な話があるんじやよ。

君の魂獣に関しての」

へ？おれ？

オズマン side

「ミス・エクセラ、この歌は知っているかね？

優しき炎。あらゆる人の上に立ち、敵をも救わん。

勝負の風。あらゆる賭けに勝利を収めん。

無情なる雷。あらゆる邪を斬り捨てん。

破戒の土。あらゆる物を壊し、戒めん。

華美なる水。あらゆる非を悔い、改めん。

選別の光。あらゆることを選び、愛さん。

断罪の闇。あらゆる悪を裁き、罪を与えん。

我、この七の片鱗と無を持ちいて聖地を邪鬼より取り戻さん。

我、七の片鱗を散りばめん。我、無を七つに分けてこの地に残さん。

再び七の片鱗、無、集まりし時、再び力目覚めん……」

「小さいころに聞いたような……」

「ふむ、まあそうじゃな。これは王家に携わる一部のものにしか語り継がれとらんしのお。

では始祖フィナゼルは知っているかね？」

「当然です。わたしたちの使う魔法を最初につくり出したり、邪鬼から聖地をとりもどした

大賢者フィナゼル・ザルドのことですよ？」

「うむ。実はその始祖フィナゼルは七人の人間の魂獣を従えていたようでの。

先の歌にもあったとおり彼らは一人ずつ火、風、雷、土、水、光、闇の魔法をほぼ無限に全てつかえ たんじゃよ。

そして火の伝説の魂獣は右手にちょうど君の魂獣のようなルーンが刻まれておったんじゃよ」

案の定ミス・エクセラは驚いて何もいえなくなっていた。

自分の召喚した魂獣が伝説の魂獣だということは主人である自分は
フィナゼルの魂を引き継いでいると

いうことなのだから。

「そこで我々は君のことを詳しく知りたいんじゃないよ。
できるかぎり教えてくれんかね、クロくん？」

？ 学園長×呼び出し＝伝説の魂獣（後書き）

タ「こんにちわ、最近詩やら三題嚳を書いていて本編の方がおろそかになってきているタクミンです。今回のゲストは・・・」

ダ「高貴なる者、ダニエル・ウーロンだと」

グ「オオオンウオ、ウエアウエウ（その魂獣のグレタスです）

」

タ「ああ、すいません。グレタスは面倒なのでこれから人間の言葉で話してもらいます」

グ「ありがと、タクミンさん」

ダ「よかったな、僕のグレタス^^」

タ「ちなみに主人と魂獣の組み合わせは男と女しかありません。だからこいつらはそうとう愛し合ってますねwwwさて、名前の由来第二段です！！」

ダ「ほう、それは楽しみだね」

グ「わたしの名前の由来は？」

タ「ほら、前にヒスイのとき話したじゃん？合宿行ってたって。そのときに長野県とおってたじゃんね？」

ダ&グ「ふむふむ」

タ「せっかくだから勉強したこと使おうと思ってさ、長野県の特徴使わせてもらった」

長野で有名なのはレタスとかぶどうじゃん？だから

グレープ（ぶどう）+レタス＝グレタス

ってわけよ

グ「・・・（ズウーン）」

ダ「ああ、グレタス！！」

夕「ちなみにおまえは・・・」

ダニエルは友達に決めてもらった

ウィロン^{II}合宿の帰りにもらったウィロン茶から

「ダノォー……ン!!!」

タ「うん．．．そんなにネーミングセンスないかなあ．．．」

ま、いいや次回予告です。

明らかになつたク口の力の一端。次回はやっと謎の人物を出せます
^^お楽しみに」

？ 告白×協力者Ⅱもう一人の魂獣（前書き）

今回のタイトル、いいものが浮かばなかった・・・

？ 告白×協力者Ⅱもう一人の魂獣

クロス side

そんな漫画みたいなこと考え付きもしなかった。

まさか自分がこの異世界の最強の魂獣の魂を受け継いでいるなんて
はつきり言ってまだ半信半疑だったが、このオズマン学園長はなん
となく信じていいような気がした。

「あの・・・信じてくれないかもしれないけど、実はおれ、異世界
から来たんです。地球の日本ってと

ころから。

彼女とピクニックに来ていたら急に謎の手が現れて、そいつが出
てきたところに飛び込んだら

ヒスイに召喚されてたんです」

・・・って普通信じないよな。

しかしヒスイ以外誰も驚いた様子がなかった。

「失礼ですけど・・・驚かないんですね？」

それに答えたのはクルムーン先生だった。

「一年前、君と同じように春の魂獣召喚儀式で人間が召喚されたんだよ。」

彼も異世界から来たって言っていたからね」

そういえばヒスイが言っていたな・・・なら・・・

「そんじゃあ天音夢羽と天音龍也っていう人も来ていませんか!？」

しかしオズマン学園長の言葉はおれの甘い期待を見事に裏切ってくれた。

「いや、すまんがそのようなものたちはしらんのお・・・誰のことじゃ?」

「・・・謎の手に連れ去られたおれの彼女とその兄です・・・」

「・・・そうか、わしのほうからも出来る限り手を尽くして探しておくわい」

「それに謎の手っていうのも気になりますね・・・」

よかった・・・

夢羽たちの情報が手に入らなかったのは残念だったが、協力者を得たのは心強い。

「あ、そうそう。今後は学園内ではあまり力を使わないでね?騒ぎになると面倒だから・・・」

「わかりました」

確かにこの力は驚異的だ。身体能力の向上が半端ない。

もしこの力をつかえまくれば、お偉いさんに目をつけられてしまうとかそんなところだろうか。

お礼を言っておれたちは部屋を出た。

「ワレが新しく召喚された魂獣くん？」

急に後ろから声をかけられた。

・・・関西弁？

振り向くと清楚な感じの女の子と金髪長髪、長身の男の人がいた。

「ヒスイ、こいつらは？」

しかしそれに答えたのはあちらのほうだった。

「はじめまして、自分はアレス・クピードーゆうもんや。そこでこっちは・・・」

「あ、は、はい。わたしはナワエ・ミウリュっていいいます。よ、よろしく願います」

っ
ていうことは、こいつらが・・・

「そんで伝説の魂獣『片鱗』の一角や。これからよろしくな」

？ 告白×協力者Ⅱもう一人の魂獣（後書き）

タ「こんにちわ、最近学校や塾などでよく眠ってしまうタクミンです。早速ですが今回のゲストは・・・」

ナ「はじめまして風巻奈於しまき なおです」

モ「おなじくはじめまして椀沢椀からさわ もみじだよ」

タ「というわけで今日はさくたんさんの「STAGE OF」から美少女二人をお呼びしました」

モ「美少女だつて。うれしいね奈於ちゃん」

ナ「僕はれっきとした男だよ！タクミンさんまでそんなことをいうの！？」

タ「ああ、ごめんごめん。奈於ちゃんは男の娘だったね」

ナ「・・・もういいです。ところでなんで今回は僕らを？」

タ「いやゝね？さくたんさんにはさ、おれのキャラをけっこう前書きに使うてくれるのに、おれは全然コラボができなくて申し訳ないなあゝなんて」

モ「へえゝそうなんだ。ところでなんでボクたちなの？澪ちゃんとかもいるのに」

タ「ああゝそれは・・・」

ナ&モ「それは？」

タ「・・・おれが君たちの事が好きだからだゝゝ！ボクっ娘かわいい！男の娘の奈於ちゃんも大好きだよゝゝゝ！！！」

ナ「ギヤアアアア！！！」

モ「タクミンさん壊れたね（笑）」

・・・

モ「二人とも鬼ごっこが終わりそうにないからボクが宣伝しとくね」

「STAGE OF」は元対人恐怖症の男の子風巻奈於ちゃんとその周辺をとりまく人々の学園シリアスラブコメディーだよ。ぜひ見

てね・・・あ、戻って来たいだね」

タ「近い未来コラボも考えています。よろしくね　では次回予告です。いろいろ明らかになった真実。そこにあらわれたもう一人の伝説の魂獣、アレス・クピード・・・次回はクロくんの意外な（？）弱点が発覚します。お楽しみに」

？ アレス×依頼Ⅱ血液恐怖症（前書き）

2000PV&500ユニーク突破！！

みなさんのおかげです^^

これからもよろしく願いますwww

目指せ、10000PV&1000ユニーク！！！！

？ アレス×依頼Ⅱ血液恐怖症

クロス side

「片鱗つて・・・？」

「ああ、別にただの呼び方やよ。自分らが勝手にそうやって呼んでるだけやから気にせんと言ってや」

ふん、でもそっちのほうがかっこいいかもな。「片鱗」だなんて。

「ところで・・・ちょっとついてきてほしいところがあるんだけど・・・ええでつか？」

「アレスさん、まだつかないんすか？」

「んゝもうちょいやよ」

いったいどこにつれていくつもりだろう？

実を言うとおれはこの人をあまり信用していない。

なんというか・・・この人を例えるなら「雲」か「闇」がぴったりくる。

つかみどころがなくて、よく形を変える、そんな第一印象を感じた。

「アンタ、本当にあたしの平民と同じ片鱗なの？」

「ん？そやけど・・・なんで？」

「だってアンタって人並みの力しかもたないって聞いているわよ。

平民みたいにバカ強いんじゃないの、片鱗って」

バカ強いってほめられてるのかけなされてるのかよくわからない。

それにしてもヒスイって気持ちいいくらいにはつきりものを言うよな

「そ、それはわたしが説明します」

「ナワエが？」

違うか。ただいつも自分を上だと思ってるだけだなこりゃ。

先輩に対しても呼び捨てだし。

「理由は2つあります。1つはオズマン学園長に言われたのと、

もうひとつは、えっと、その・・・恥ずかしいんですよ・・・目立つのが・・・」

かっかわいい。

顔を赤らめてそんなことを言うナワエさんはものすごく女の子らしくて思わず守ってあげたくなる。

・・・いかにいかに！！！！

おれには夢羽がいるんだから！！！！

でも同じことを思ってる人がもう一人いた。

「ハアーン、もうかわええのおナワエちゃんは！！！！」

「や、やめてください・・・その、絵的にダメです・・・」

たしかに今のアレスさんは女子高生に抱きついてるただの変態にかみえない。

「おお、すまんのぉ。おつ、ついたで」

ドアを開け、中に入るとモ。ハンの集。所みたいのところだった。

ちゃんと受付嬢みたいなお姉さんもいる。

もしかしてク。ストとかあるのかな？

「ここは見たとおり受付場よ。各地から寄せられた依頼をつける場所よ」

ほんとにそうだった・・・

「でもさ、なんで学園内にあるんだ？学生じゃない魔法使いもいる

だろ？」

「こ、ここは学生に合わせた依頼のみを集めているんです。その、上級生はここで依頼を受けたりもしますから・・・」

なるほど、授業でもあつかってるのか。

確かにいくら知識を積んでも実践で生かせなきゃ意味がない。

「それで、今回は一個依頼を受けて、クロくん、君の実力のほどを見せてもらいたいんやよ」

ほお、おれを試すか・・・

「いいじゃねえか、受けてたつぜ」

「ありがとさん、そんじゃあ今日はもう遅いからまた明日、六時にここ集合でええか？」

「ああ、かまわないぜ」

ヒスイもけつてこないからOKってことだよな？

「あ、あとヒスイちゃんだけ残ってくれへん？ちょっと話があるんやけど・・・」

「ん？なによ？」

「あんな・・・」

ヒスinside

「何話してたんだよ？」

「んっ、秘密よ」

アレスに言うなって何度も言われたし、言わなくても困るようなものじゃないはずだしね。

それにしても平民が異世界の住人だったなんて・・・

突然召喚されたんだから、やっぱり帰りたいわよね。

「ねえ、アンタさ、元の世界に戻る気はないの？そういうこと一度も言ってないけど」

「あの時も言っただろ？おれは一緒にこの世界に来たはずの彼女とそのお兄さんを見つけるまで帰るつもりはねえよ」

ふっん、強いよね。でも・・・

「家族は？心配してるんじゃないの？」

すると平民は一瞬固まった。

家族のことを考えていなかったのかしら？

「おれな、実は家族がないんだ」

・・・えっ・・・

「三年前くらいに家に押し入ってきた強盗にみんな殺された。おれはちょうど親とケンカして家を出てただけだな」

平民は思い出すようにしてどんどんしゃべる。

「ごめんなさいも言えなかった。その後おれは犯人をぜってえー殺してやるっていきまいてただけどさ、そいつは刑務所の中で自殺しちまってさ・・・復讐すら出来なかったんだ・・・たくひどい話だよな・・・」

「その・・・大丈夫だったの？」

そんなわけないのにと聞いた後後悔した。

家族を殺され、復讐をも奪われて平気でいられるはずがない。

「んゝまあけっこう落ち込んだけどさ、夢羽や龍也さん、周りの人たちのおかげでなんとかあったよ」

そういつて平民は笑顔を見せた。

・・・そうね、今晚だけ、今晚だけは優しくしてやろう。

「平民、なんか食べたいものある？作ってあげるわよ」

まあ平民って呼び方は変えないけどね。

「?どうしたんだ急に」

「ちょっとね・・・特にリクエストがないならわたしが勝手に作っちゃうわよ」

「ああ、頼むよ」

ふふん、わたしの絶世の料理をたべさせてさらなる忠誠を誓わせるわ。

なんかコイツ生意気だし。

結局優しさとは少し違うのであった。

「・・・あ」

パリーンッ！

あゝあ、やつちゃった。

結構高かったと思うけどな、あのお皿。まあやつちゃったものは仕方ない。

「平民、これかたず」

といいかけてやめる。

今日だけは優しくするんだった。

「イッタ！」

「おいおい、大丈夫か？」

平民は近寄ってきてわたしを見てから急に固まった。

「?どうしたのよ平民」

しかし何度ゆすつても動かない。

・・・・・・シュツ

結局けってしまった・・・

が、それで平民がやっと動くようになった。

でも様子が変だ。

「あんたいった「悪い!!」」

大きな声でわたしの問いをさえぎり、答える。

「おれ・・・血液恐怖症でさ・・・血を見るの、ダメなんだ・・・」

？ アレス×依頼Ⅱ血液恐怖症（後書き）

タ「こんにちわ、友達に避けられるどころかバカにされてるタクミンです・・・あっなんか泣けてきた・・・き、今日のゲストは！！」

ア「こんちわ、アレス・クピードーや」

ナ「な、ナワエ・ミウリュです・・・」

タ「というわけで今回はもう一組の片鱗ペアを呼んでみました」

ナ「あ、ありがとうございます・・・」

タ「アレスはずっと出したかったキャラです^^姿は安西信行先生の漫画「MIXIM1」のパンドラを想像してください」

ア「ほおくなるほどのお・・・」

タ「というわけで今回は早めに切り上げます^^」

ア「エッ！！なんでΣ（。d 111）」

タ「今日中にもう一話更新したいんだよ。というわけで次回予告です。次回はちよつとバトルてき展開です。そして急展開になります

！！！！お楽しみに！！！！」

？ ボスザル×裏切りⅡ 理性崩壊

アレスside

「おっ、来たな。おっはようさ〜ん！！二人ともしっかり寝れたあ？」

「おはよう」

「おはようございます」

ん？クロくんの元気がちよつとないのお・・・？

まつ、ええか。

「ほんなら依頼受けに行こか。受付のねえちゃん、なんかええ依頼あらへん？」

「それではこちらはどうぞでしょう？ヤマザル20匹の討伐」

「これでええよな？」

ヒスイちゃんとクロくんも了解したことで受注に必要な事柄を記入する。

「・・・ほいっと。いつもええ仕事しとんね、ねえちゃん。無事帰ってきたら結婚してくれへん？」

「それではお気をつけていつてらっしゃいませ」

スルーかいな・・・ま、ええわ。いつものことやし。

・・・・・・・・ほんまにええ仕事しよるわ。

これからすることを思うと少し胸が痛んだ。

でもこれがクロくんのためにもなるんや。

やるしか・・・ない。

クロス side

「おらっ！！！」

「ウギイ！？」

ところ変わって岩山。今おれたちはヤマザル20匹の討伐に来てい
る。

しかし今回はおれを試すためにやってるみたいなのでおれしか戦っ
ていない。

ヤマザルの背後に回り、首を捕らえ、へし折る。

そんな戦法を繰り返していた。

だって血をみたくないから・・・

最初は生き物を殺すことに抵抗はあったが、こいつらは人里を襲っているから仕方がないだろう。

そう思うと少しだけ気が楽になった。

確かもう13匹倒したはずだ。

周りにはまだ5匹くらいが距離をとってこちらの様子を伺っている。

そのうちの1匹が突っ込んできたのですかさず首をつかまえ、折る。

そのときだった。

残ったヤマザルたちが急に叫びだした。

すると岩山の上のほうからなにか大きな影が落ちてきた。

砂煙が収まるとその姿があらわになる。

一見見るとヤマザルみたいなのだが、まず大きさが違う。

普通のヤマザルはせいぜい小学5年生くらいの大きさだったがこのボスザル（今命名）は車1・5個くらいもある。

しかもキバやツメがヤマザルよりはるかに発達している。

ヤマザルたちはボスザルにすべてを任せ、逃げていった。

先手必勝!!!

おれはまっさきにボスザルに突っ込む。

しかしボスザルは避けようとせず、逆におれをその鋭いキバで噛み切ろうとしていた。

「やっべー!」

ボスザルの顔面を片手で受け止める。

—安心しているとボスザルが右腕でおれを殴りつける。

完全に前に体重をかけていたため、横からの攻撃にあっけなく吹っ飛ばされる。痛くないけど。

ボスザルがとどめとばかりにまた噛み切ろうと大きな口を開く。

ち・・・もう血を見ないで勝つのは無理かな。

おれはボスザルのキバをつかみ、へし折る。

これはさすがに効いたのかボスザルが後ろによろめく。

その眉間にへし折ったキバを突き刺す。

大量の血が出て、少し痙攣したあとボスザルは動かなくなった。

また血をみちまったよ・・・

「ア、アレスさん。こいつは20匹の中にカウントされるんですか・・・ね」

血をみたため動くことが出来ないおれは振り向かず質問する。

ザシュツ！！

「グツ！」

突然背後から鋭い攻撃がおれの背中を切り裂くのが音でわかった。

しまった。まだヤマザルがいたのか！？

無理やり体を動かし、後ろを見るとそこには大鎌デスサイズをもったアレスさんがいた。

おれには今のアレスさんは、死神のように見えた。

「つく、何ですかアレスさん！！！」

しかしおれの問いには答えずに次々に斬撃を加えてくる。

おれはなすすべもなくその場に崩れる。

そんなおれにヒスイが心配そうに駆け寄る。

「ちょっと！なにしてんのよ！！」

こんなときにいうのもなんだと思うが、ヒスイがおれのために怒ってくれたのが少しうれしかった。

「どけや」

「キャッ」

アレスさんはヒスイを殴って吹っ飛ばした。

女の子を殴るとかゆるせねえ！！！！

「デメエ！！！！」

「ワレに他人の心配をしとる暇があるんかいな」

アレスさんは残酷なまでに躊躇なく斬りつけてくる。

「そんなに睨まんといてや・・・」

睨みつけるおれにアレスさんはお構いなく大鎌を構える。

「自分だつてこんなことしたくあらへんのよ・・・」

アレスさんが大鎌を振り下ろす。

思わず目をつぶる。

・・・ああ、死んだな、おれ。

でも死んだ瞬間ってなんにも感じないんだな・・・

痛みも背中のが少しひどいだけだし・・・

あれ・・・おかしくないか？

おれって・・・死んだよな・・・じゃあ、なんで痛みを感じるんだ？

おれはもう一生開くはずがないと思ったまぶたを開く・・・すると、そこには・・・

「ヒス・・・イ？」

おれの目の前には両手を広げて立つヒスイ・・・

なんで・・・？

おれがそう呟こうとした、そのとき・・・

ドサッ！

ヒスイはおれの上に倒れ込んだ・・・

「お、おい！」

おれがヒスイの肩を抱いたとき・・・違和感を感じる。

ネチャ・・・

聞き慣れない音におれは右肩に触れた手を見る。

わかりたくなかったが、わかってしまった。

おれがこの世の中でもっとも恐れるもの・・・

・・・黒く、ねっとりとした生暖かい液体・・・・・・・・血だった。

その瞬間おれの中であの日のことがフラッシュバックする。

まるで走馬灯のように家族全員が殺された日が再現される。

「うつさい！！死んじまえ！！！」

「親に向かって死ねとはなんだ！！！！！」

おれは父親の怒声をまったく無視して家を出た。

ちよつとしたことでケンカしてしまった。

完全に悪いのはおれだったのだがまだ中学生に成り立てだったおれは反抗期まっさかりだった。

二時間くらいたってからおなががすいていることに気づいた。

それと同時にさびしくなる。

「・・・謝ろっかな」

そう独り言をつぶやき、足の向かう方向を180度変えて走り出す。

「ただいま！！父さん、さっきはごめん！！！」

ドアを勢いよくあけ、大声で叫ぶ。

しかし返事はない。

・ ・ ・ そんなに怒ってるのかな？

「あの……父さん？ほんとにおれがわる」

そこまで言ったとき嫌な臭いをするのに気づいた。

嫌な予感がし、急いで食卓に向かう。

するところには.....

二度と口をきいてくれない父、母、姉の三人がいた……

「……おれのせいかな？ おれが勢いよく飛び出し、鍵もかけずに出て行ったせいなのか？」

そう思うともう理性を保っていらなかった。

「ウ・ウ、ウフアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

おれの憎しみは全て犯人に向けられた。

ぜっ
たいに殺す！！！！！！！！！！

走馬灯が終わったとき、アレスさんの姿がおれたちの幸せを一瞬に

して奪った犯人の姿と重なる。

（ぜったいに殺す!!!!!!!!!!!!!!）

「あああああああああああああああああああああ!!!!!!!!!!
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

・ おれの理性がまたあのときみたいに崩壊したのはそのときだった・

？　ボスザル×裏切りⅡ 理性崩壊（後書き）

タ「こんにちわ、友達がテストで全部満点とらなきゃいけないとい
っていたのをきいて同情しているタクミンです^^」

ク「今、本編でやばい状態にあるクロです」

タ「今日はさびしいねえ・・・」

ク「なんで今日はおれだけなんだ？」

タ「んゝなんかみんな夏休みの宿題に忙しいから来れないって」

ク「ほんとかよ・・・」

タ「うゝん、というわけでクロくんなんかさ、いい勉強法ない？」

ク「おれは何でも教材をやるとき、テキストには答えを書かないん
だ。それで間違えた問題には印をつけて正解するまでやりなおす！
！！これでOKだぜ」

タ「ふむふむ・・・うゝん、むずかしいねえ・・・ま、今日はこん
なもんでいいか^^がんばったし。でわ次回予告です。なぜか裏切
ったアレス。理性が崩壊したクロ。この緊迫した状態からどうなっ
てしまうんでしょう？お楽しみに！！

憎悪
×
武器
II
覚醒

ク口side

憎い。

この子を、父を母を姉を殺したアイツが憎い。

[illegible]

憎い憎い憎い
憎い憎い憎い

憎い憎い憎い
憎い憎い憎い

憎いならどうすべきだ？

復讐すべきだ。

復讐とは？

アイツを殺すことだ。

殺すには？

素手じゃダメだ。

武器がいる。

そう、武器が……

アレスside

さっきのクロくんの叫びはあまりにも悲痛だった。

感情を爆発させるのが目的だったとはいえ、罪悪感が渦巻く。

そのうちクロくんが立ち上がった。

しかしその目はもう昨日ダニエルたちを助けたときのような正義感
はもちろん、

いつもみせる優しさなどは微塵もなかった。

あるのはただ復讐も望む目。

それだけだった。

「死ね……」

それだけ言っとクロくんは突然顔面めがけてパンチを繰り出してき
た。

「くっ」

バック転でなんとかかわし、距離をとる。

しかしクロくんはなんなく近づき、いつの間にひろったのか大きな石を武器にして構えている。

それを右足狙って投げつけてきた。

「危なっ」

石をかわすために下を一瞬見たのが命取りだった。

クロくんは回し蹴りでワシの右手を蹴り上げ、大鎌【常闇^{とこやみ}】を奪い取る。

（なるほど、クロくんは自分の獲物が目当てやったんか・・・）

でも特にあせったりはしない。なぜなら・・・

クロくんがワシめがけて常闇を振り上げたとき、常闇が消えた。

「！！！???」

「クロくん、よく聞いてや。これは自分ら片鱗^{けいら}だけがもってる「魂^{たま}の欠片」^{しいのかけら}。つちゆう武器や。んでもってこれはワシが念じるだけで出したり消したり出来るんやよ・・・」

そういつて自分の右手にもう一度常闇を顕現させる。

それを見たクロくんは膝をつき、戦意喪失した・・・

クロside

なんだよそれ・・・

なんなんだよそれ!!!

また復讐できないのかよ・・・・・・・・

そんなのってねえよ!!!!!!

・・・・・・・・おれにもつと力があれば・・・

力があれば!!!!!!

力がほしい・・・

力が、ほしい。

力を・・・力を・・・

「力をよこせ————!!!!!!」

そういったと同時に体が熱くなっていった。

心臓の鼓動が早くなる。

そして、なぜかはわからないが、口が勝手に開いた。

「来い!!!!!!^{ほむ}焰!!!!!!」

？ 憎悪×武器Ⅱ覚醒（後書き）

タ「こんにちわ、今所持金が167円しかないタクミンです^^今日のゲストは」

ム「わたしたち天音兄妹です」

龍「タクミンもうすぐテストがあるんだって？」

タ「そーなんだよ・・・だからしばらく更新できないかも・・・」

ム「タクミンさん、予約掲載って知ってますか？」

タ「！！その手があったか」

龍「忘れていたのか・・・」

タ「まあね、んじゃ今日がんばるかな・・・それではグダグダのラジオはここの辺にして次回予告です。最後になんか覚醒したクロ。焰とはなんのことでしょうか？お楽しみに」

X I 焰 × T A L K T I M E Ⅱ 和解（前書き）

予約掲載って便利ですね ^^

XI 焰×TALK TIMEⅡ和解

アレスside

「来い!!!! 焰!!!!!!」

クロくんがそう叫んだあと、クロくんの右手に日本刀【焰】が握られる。

（よし、うまくいった!）

クロくんは「魂の欠片」を無事発動させたのだ。

あとはクロくんを正常に・・・

「うわっ」

クロくんが焰で斬りつけてくる。

自分も常闇の柄でなんとか受け止める。

元々日本刀と大鎌では相性が悪すぎる。

大鎌ではすばやい日本刀に反応しきれない。

しばらくそんな攻防が続いていたが、そろそろ限界・・・

「死ね・・・」

そついうとクロくんは焰で突いてきた。

「ぐっ、」

なんとかよけようとしたのだが、肩に深く刺さってしまった。

そろそろ正常に戻さんと自分がやばいわ!!

「ヒスイちゃん!!ヘルプミーや!!」

「こら!!!!クロ!!!!やめなさい!!!!!!!!!!」

クロside

二度と聞けないと思っていた声が聞こえたことでおれの理性が戻ってくる。

「え?ヒスイ?」

思わず目を見開く。

「ふう、やっと動けたわ」

ヒスイのその声で完全に自我を取り戻す。

「ひ、ヒスイ!?生きてたのか!?!」

「ええ、ちゃんとピンピンしてるわよ」

「幽霊じゃないよな!？」

「失礼ね!」

「グフツ」

よかった・・・けられてるってことは足がある。

幽霊じゃない。

でもなんで？確かにあの時ヒスイはアレスさんに斬られて死んだはず・・・

「すまんかったのお、今から自分が説明するからよお聞いてや」

「アレスさ・・・」

そこまで言っつて、おれはおれやアレスさんについている大量の血を見て気絶してしまった。

「おっ起きたみたいやな」

そういうアレスさんにもう血はついていなかった。

よく見るとおれの傷もふさがっていて、血はなかった。

「ナワエとわたしが『ヒーリング』で傷をふさいで、『クリア』で服を元通りにしたのよ」

！？ヒスイが魔法を使えたのか！？

「今、ぜったい失礼なこと思ったわよね」

痛い痛い、ごめんなさい。

謝るから顔を踏みつけている足をどかしてください。

「まあまず、すまんかった！！！」

アレスさんが土下座してきた。

・・・！そっいえば！！！！

「・・・なんであんなことしたんすか？」

若干怒りを込めて問う。

「今から順を追って説明するさかい、怒るのはもうちょい待ってや」

「・・・わかりました」

いろいろ疑問があるが、それは話を聞けばわかるのだろう。

「まず、この武器「魂の欠片」や。戦ってるとき言っただけ、しま
い方わかる？」

焰のことか・・・

そういえばわからないな。

「あ、その顔は覚えてへんね？もっかい言っけどこれは心で念じる
だけで出したり消したりできるで。出てこい！消えろ！ってな」

そしてアレスさんは常闇を三回出ししまいました。

真似してみると案外簡単に出来た。

「こんなの知りませんでしたよ」

「そうなんや。魂の欠片は最初からだせるもんとちゃう。感情が最
高まで高まったときに初めて発動するんや」

「そ、その、アレスもわたしが魔物に殺されそうになったときに常
闇を発動できたから・・・」

なるほど。主人のピンチに発動すると思っただけだ。

・・・アレ？

「でもさ、アレスさんはヒスイを斬ったんじゃないんですか？実際
倒れたし」

アレスさんはちょっと申し訳なさそうに頭をかくとある袋を取り出した。

それに入っているのは・・・

「血!？」

おれはまた固まる。

「正確には偽物やけどね。知り合いに頼んで錬金してもらたんや」

もうやだぁ・・・こつちの世界にきてから血をいっぱい見てるよ・

実際二日しかたつてないのに一年分の恐怖を味わった。

「これを斬ったと見せかけてヒスイちゃんにぶっかけたんや」

「おかげで服が一個台無しになっちゃったわ、よ!」

「けぺ!!」

どうやらアレスさんもヒスイのけりは痛いようだ。

「と、とにかく、話をまとめると今回はクロくんを覚醒させるためにみんなでグルになっとったっちゅうことや。すまんかった!!!
!焼くなり煮るなりなんでもしてくれ!」

でもおれはもうやることはわかっていた。

パコッ

「あイタ」

「・・・これでチャラです」

アレスさんは目を見開いておれを見る。

「そんな、こんなんですましてもらえるんか？」

「いや、許さない」

間も入れずにおれは言う。

「アレスさんがおれやヒスイを傷つけたのは事実だ。許す気は、ない」

「ならもつと厳しいこ」でも!」

アレスさんの言葉をさえぎる。

「でもさっきまでのおれならいざ知らず、今のおれにはアレスさんが悪い人にはみえないんすよ」

「なんでや?自分はクロくんのためとはいえ、君らを危険にさらしたんやで?」

ほら、やっぱりだ。

「それはおれのためだったんでしょう?それにちゃんと謝ってくれ

た。それだけでおれはあなたを信用することができますよ」

「クロくん・・・ありが「ウギヤア！！！」」

ものすごく空気を読まない声がした方向に振り返ると残りのヤマザルとさらにボスザルが一匹いた。

「・・・クロくん。ここは自分に任せといて」

ちよつとしたお返しや。そういつとアレスさんは常闇を顕現させ、ヤマザルたちを斬りつける。

あつという間にボスザルだけになったが、ボスザルがアレスさんに向かつて飛びかかる。

「ワレはだれに向こうてケンカ売っとんのや」

それだけ言つとアレスさんはなめらかな動きで常闇を振り回した後、ボスザルに向かつて走り出した。

ザシュザシュザシュッ

ボスザルは一瞬で肉塊になってしまった。

「ワシに生意氣した罰や」

親指を下に向け、首を切るように横に動かすアレスさんはとてもかっこよかった。

もしかしたらとても強く強い人を仲間にしたのかもしれない。

XI 焰×TALK TIMEⅡ和解（後書き）

タ「こんにちわ、ひじを突いてご飯を食べる癖がなかなか直らないタクミンです。クロ、ダニエル、好きな曲とかある？」

ク「おれはナルトとかはがれんの曲が好きだな。かつこいいし」

ダ「僕は貴族だからね、ベートーベンとかモーツアルトの作曲したものが好きかな」

タ「ふゝん、みんないろいろなもん好きなんだね。ちなみにおれは「うたかた花火」と「さよならメモリーズ」が好きだぜ」

ク「あ、うたかた花火のほうは知ってる。ナルトの今のエンディング曲だろ」

タ「うん、あれはいいと思うよ。みなさんも暇でしたら聞いてみてはいかがですか？それでは次回予告です。いろいろわかったXⅠ話。次回はアレスの本当の頼みが。さらに敵の予感・・・お楽しみに！！」

XII 修行×怪盗シルフⅡ秘密の部屋

ヒスイside

わたし、ヒスイ・エセラは今非常にイライラしている。

「早く帰ってきなさいよ~~~~~!!!!!!」

クロがあの日以来どこかに消えてしまっている。

死んでいるなんてことはまずないから、自分の所から逃げ出したんじゃないかと疑っているのだ。

実は魂獣がどんなところにおいても自分の所に呼び戻せる術もあるのだがまだ習っていないのでスペルを知らない。

「ただいま」

「~~~~~!!!!!!」

「グフツ!!!!!!」

だからクロが帰ってきたとき今までで一番強いけりをお見舞いしてしまった。

「ヒスイ、今は・・・痛い・・・」

「知らないわよ!!!!!!アンタ今までどこに行ってたのよ!!!!!!」

クロがきてからなんだか怒鳴ることが多くなった気がする。

「アレ、もしかして心配してくれてた？」

「――！？そ、そんなわけないでしょ！！クロがいなかったから雑務が大変だったんだからね！？」

実際少しだけ心配していた。どこかで深手を負っているのではないかと。

まあそんな気持ちは十あるうちのいくらかはなかったが。

「そんなにけるなよ・・・悪かったって。今までの3日間はアレスさんと修行してたんだ」

けりの足を止めてクロを見る。

「ふうん、で？ちよつとは強くなれた？」

「まあな。ヒスイよりは強いと思うぜ？」

「うっさい」

にやりと笑うクロに再びけりをいれる。

「いてっ、でさ、ちよつとアレスさんに明日きてくれって頼まれたんだけど、大丈夫か？」

クロside

いつたい何の用事だろう？

今は言われたとおり食堂に来ているがなかなか来ない。

「やあクロ。おはよう」

「あ、ダニエル」

ちょっと様子を見に行こうと椅子から立ち上がったがそのときにダニエルにあった。

「クロ、【怪盗シルフ】をしってるかね？」

ん？知らない・・・

「だれだ、それ？」

「最近出てきた盗人だよ。いろいろなところから宝石を盗んでいるらしい。それでしばらくすると宝石をわざわざ返しにくるんだよ」

なんだそりゃ？わざわざ盗んだのに返すなんて、変な怪盗だな。

「でもなんでわざわざそんな話を？」

するとダニエルはおれにしか聞こえないように顔を近づけてくる。

「それがね、きみ。その怪盗シルフがこの学園にいるって噂なんだよ」

「え！？なんで？」

「さあ？根拠のない噂だからね、なんとも言えないよ」

奥を見るとアレスさんとナワエさんがこっちに向かっていた。

「そっか、ありがとな。それじゃ」

「ああ、それでクロ、一緒に朝食はどうだね？」

「わりい、おれ今から用事あるんだ。また今度な」

アレ？ダニエルがにわかに落ち込んだぞ？

・・・

まいっか。

「おおっクロくん。遅れてすまんのお。そんで早速ですまないんやけど・・・場所変えへん？」

「なんでわざわざ場所を変えたんすかアレスさん？」

一緒に朝ごはん食えると思ってたから何も食わなかったのに。

「す、すいません。あまり人に聞かれたくなかったもので・・・」

「そうや。もう一個頼みがあるんやけど」

「おれをだまさないんならいいですよ」

まあそんなことはもうされないってわかってるけどな。

「あんな・・・クロ君たち、【秘密の部屋】って知っとるか？」

なんだそのハリ。タからパクったような部屋は。

「実はこの学園には一部の人しか知られてない秘密の部屋っちゅう場所があるんよ。そのおくにはめっちゃ珍しいお宝があるみたいやねんけど、自分らだけじゃどうにもならんのよ・・・」

頼む！！クロくんたちもついてきてくれへん？」

へえ、おもしろそうだ。

「もちろんいいわよ。でもそれ相応の報酬はいただくけどね」

ヒスイはがめついね、貴族のくせに。

「そんなら決まりや。さっそくいこか」

X I I 修行×怪盗シルフⅡ秘密の部屋（後書き）

タ「こんにちわ、エアコンに引き続き、トイレも壊れてしまったタクミンです^^」

ア「いやいや。^^やないやろ？ けつこうたいへんなんとちゃう？」

タ「ノープログラム。家にもう一個トイレがあるから大丈夫だぜ」

ヒ「ふーん、ま、どうでもいいけどね」

タ「ヒスイひどい！？」

ア「それがヒスイちゃんやからね（笑）、（^^）」

タ「あゝなんか今日がんばったしめんどいからここらへんで終わるわ」

ヒ「あんたのほうがひどいじゃない！！！」

ア「そやで。自分なんか全然でてへんよ・・・（T T ; そんなやと見てくれる人減ってまうで？」

タ「うつ、それはいやだΣ（。d 111）でももうちょっと勉強しなきゃいけないだよ！！！」というわけでいつもわかりにくい次回予告です。ついに出てきた敵みたいな奴（まあ噂でだけ）そして秘密の部屋とは！？お楽しみに！！」

XIIII 図書館×入り口Ⅱ三人寄れば文殊の知恵

クロス side

「おつついたで」

ドアを開けると・・・アレ？なんかデジャヴ？

まあいいや。

図書館だった。人氣が少ない。

「ちよ、ちょうどよかったですね」

「せやな」おつ、あつたあつた」

アレスさんが一冊の本を指差して言った。

題名は・・・「人はなぜ筋肉にひかれるの。」

・・・なんだそりゃ？別に惹かれねえよ。あと隠す必要ないと思う。

ナワエさんが「人はな（以下略）」を引き抜くと本棚が動いて階段が現れた。

よくこつこのアニメとかで見てたけどどついう仕組みなんだろう？

「図書館にこんなところがあるなんて知らなかったわ・・・」

「せやから秘密の部屋ゆうんやろ？知らんのが普通やよ・・・けぺっ！？」

あっけられた。

「誰が普通なのよ！！わたしは貴族なのよ！！！」

「けぺっ！！！」

どうやらアレスさんはけられると「けぺっ」っていうみたいだ。

階段を降りるといかにもダンジョンらしいところに来た。

でも・・・・・・

「なんなのコレ！！入り口多すぎるわよ！！！」

「そうなんやよ・・・自分らも何回かチャレンジしてるんやけどね。スタートすら切れてへんのよ・・・けぺっ！？」

ヒスイ怒りのドロップキック！！！！

女の子がそんなことするのはマジでダメだと思う。

「なんてめんどくさいところにつれてきてくれたのよ!!もう!!」

「ぐはっ!?!」

おれまでけられた。やつあたりはよくないぞ!?

「と、とにかく三人寄れば文殊の知恵やで? (まあ四人やけどw) 協力しよーや」

「三人折ればモ。ンジャの知恵?????」

ヒスイとナワエさんが不思議そうに首をかしげる。

・・・でも今のは問題発言ですよ?

三人折ればって怖えーよ。

モ。ンジャってのはアウトだと思う。

「ギリギリセーフよ、クロ」

「心を読むな」

「んまあまあ、話戻そーや。三人寄れば文殊の知恵うちゅうのは特別に頭の良い者でなくても三人集まって相談すれば何か良い知恵が浮かぶものだって意味なんやで」

へえーと二人は感心してる。

というかアレスさんって・・・

「やっぱりアレスさんも異世界から来てる人なんですよ。その・・・
帰る方法探さなくていいんですか？」

「ん？まあ自分は元いた世界でも一人やったし、いろんなところを
ブラブラ歩いとるだけの人生やったからのお。特に未練はあらへん
のよ」

そっか・・・んじゃその点ではアレスさんはあてに出来ないかもな
・・・

「大丈夫だよ。もしクロくんの頼みなら幾らでも聞いてやるさかい
安心してや」

アレスさんは幼い子供に言い聞かせるように優しく言った。

というか子供扱いされた。でも・・・

「頼りにしてますアレスさん。とりあえず・・・手当たり次第いき
ますか」

おれたちは近くにあった×マークのついた入り口に入っていた。

このとき、おれたちはまだ誰一人、忍び寄る影に気づいていなかった・・・

XII
図書館×入り口〃三人寄れば文殊の知恵（後書き）

タ「こんにちわ、最近ジャンプ系の漫画にはまっているタクミンです^^今回からコーナーをもうけていききたいと思います!!」

ア「なんや、いきなり・・・コーナーてなんのことや?」

ク「ホラ、よくあるじゃないすか。ラジオで「でわ次のコーナーはこちらです!」みたいな。そんな感じだと思いますよ」

タ「そう！記念すべき最初のコーナーはヒスイ・エクセラさんの『お悩みなんか蹴ってやるわ』です！！！」

ク「ありがちなコーナーだけど名前はありがちじゃない!? ぐはっ」

ヒ「うっさいわね。なんだっていいでしょ」

ア「うわっ、ヒスイちゃんいつのまに？」

ヒ「今さっききたとこよ。で？最初のお悩みは？」

タ「H・N【異世界の焰くん】おれのちかくにことあるごとに蹴つてくる女の子がいます。女の子なのにドロップキックや回し蹴りをするのはよくないと思うのですがどうすればいいでしょうか？おれの安全のためにもよろしくお願いします・・・だそです。ヒスイさん、返答は？」

「あきらめなさい……！」

「タ&ア、え？」

ヒ「きつと、というかぜつたい【異世界の焔くん】が全面的に悪いはずだからあきらめなさい。それでもけられたくないんだつたらその女の子を一生敬うことね」

「タ&ア（なんて自己中な答えなんだ・・・）」

「ヒ」ところでクロ。ちょっと話があるんだけどいいかしら？」

ク「え？いや、ちよまつ……ぐはっ、……」

タ「クロかわいそうに……。それでは次回予告です。クロたちが挑むは入り口無数のダンジョン!! どうやって入り口をみつけるんでしょう? それに忍び寄ってきている影とは? お楽しみに!!

XIV アン・ヤシロ×ダニエル「簡単!?(前書き)

5000PV&1000ユニーク突破!!!

ありがとうございます!!!感激です^^

XIV アン・ヤシロ×ダニエル「簡単!？」

クルムーンside

クロたちがダンジョンに入ってるそのころ……

おや？資料室に誰かいますね……

「おや、ミス・ヤシロ。こんなところで何をなされているのです?」

そこにいたのは秘書のアン・ヤシロ先生だった。

「あ、ミスタ・クルムーン。たいした用ではありませんよ」

「それは……宝玉に関する資料ですね。宝玉に興味があるのですか?」

「ええ、好きなんですよ、こついの」

……

沈黙の時間が続く……

……がんばれ私!!!今言わなくていつ言うのです!!!

「あ、あのミス・ヤシロ、もし、よろしかったら、なんですが……一緒に昼食はいかがですか?」

言った・・・言いましたよ!!!

ミス・ヤシロは少し考えた後につこりと微笑んで申し出を受けた。

「ええ、よろこんで」

二人は並んで歩き出した。

「ねえ、ミスタ・クルムーン」

ちよつとくだけた言葉遣いになってミス・ヤシロが話しかけた。

「は、はい？なんでしょう？」

思わず声が裏返ってしまう。

たぶん私は自分の誘いがあっさり受け入れられたから気をよくしているんでしょうか？

「秘密の部屋は入ったことありまして？」

「ええ、ありますとも」

しかし秘密の部屋のことは極秘事項なので言うことはしない。

「わたくし、そういうのにも興味ありますの」

前言撤回。愛は何者にも勝るようです。

私はミス・ヤシロの気をひきたい一心で必死に二年くらい前の記憶

をあさる。

「まずですね、秘密の部屋は入り口が無数にあるんです。

で、その中から本当の入り口を見つけるには・・・

このくらいですかね、私がお話できるのは「

ミス・ヤシロは満足げににっこりと微笑んだ。

「大変興味深いお話でしたわ、ミスタ・クルムーン」

クロside

「はあはあはあ・・・」

おれたちはあれからいくつもの入り口に入っていったがどれも行き止まりだったり、元の場所に戻ってしまったりした。

「それにしてもいろんなマークがあるわね・・・」

「たしかに・・・」

ヒスイが言ってるのは入り口の横に書いてあるマークのことだろう。

□ だったり× だったり ♪ だったり。それに大小バラバラだ。

「・・・・・・・・！！」

「・・・・・・・・クロくん・・・・・・・・」

「ええ、わかってます。おれが取り押さえにいきます」

ビシュンッ！！！！

「！！！？？」

おれは先ほどから隠れてこちらをつかっていた人物に飛びかかる。

しかしそこにいたのは・・・

「ってダニエル！？」

「お、おどろいたな、クロ・・・・・・・・・・」

「誰や？クロくん」

「おれの友達つす。ダニエル、どうしてここに？」

するとダニエルは申し訳なさそうに頭をかきながら言った。

「いやね？クロとヒスイが図書館に入ってたと思ったたら急に消えたじゃないか！！！」

慌てて追いかけてきたらここに来たわけだよ。

・・・ところでその二人は誰かね？」

「あんな・・・」

おれたりはことの一部始終を話した。

「なるほど・・・で、入り口すら見つけれんのだね？」

「うっさいわね！！今探してんのよ！！！」

「うぎゃっ！？」

ダニエルは倒れたまま腕を組んで考え始めた。

約十秒後、ダニエルはひらめいたようにポンツと手をたたいた。

「何だ、簡単じゃないか」

「え！？」

XIV アン・ヤシロ×ダニエル「簡単！？（後書き）」

タ「こんにちわ、今日20時くらいにとてもショッキングなことがあったタクミンです・・・」

ク「なんだよ、今日は暗いな」

ア「せやで。タクミンらしくあらへんよ？さ、元気だして！！」

タ「クロ、アレス・・・お前らいい奴だな」

ク「いやいや、当然だぜ？タクミンは作者様だからな」

ア「そやそや（こうやって恩売つとけば出番増えるかもしれへんし^^）」

タ「・・・にしてもクルムーンのやろう、ハゲのくせになんで若い美女秘書と食事できるんだよ・・・むかつくなあのハゲ親父。おれなんか・・・ブツブツ・・・」

ク「おい、タクミン？もどつてきてよ」

ア「だいたい自分がそんな風に書いたんやろ？」

タ「・・・ブツブツ・・・」

ク「ああ、だめだ戻ってこない」

ア「そういや、クロ。タクミンの前の作品（PCにはあげてないです！！）の感想で友達が「なんか美少女が多かったね。タクミンっばいよ」なんていわれたんやつてwww自分としては美少女いっぱい出てきてほしいんやけどなwww」

ク「（そういえばこの人女好きだっけ・・・）今回はおれが次回予告します。おれたちのいないところでなにやら動きがあったみたいだな。まあおれとしてはどうでもいいけどな。どっちかっていうと怪盗シルフの方が気になる。っと話戻すか。そしてダニエルの推理した本当の入り口とわ！！！！お楽しみに！！」

X V 印×魔物Ⅱキングなスライム（前書き）

遅くなって申し訳ありませんm（――）m受験生ですので・・・

XV 印×魔物Ⅱキングなスライム

ヒスinside

どういうこと？

入り口がそんな簡単にわかるの？

「どゆことやダニエルくん？」

わたしの疑問はアレスが言ってくれた。

「ふう、いいかい？順を追って説明するよ」

なんかむかつく。

「ヒントをあが」「早くしろ！！！！」「」

みんなぶちギレました。

「まずここには僕たちみたいに宝石を探しに来た人が何人もいるはずだ。そいつらも当然今の僕らのように入り口がわからない」

ダニエルは自慢げに自説を述べていく。

「そいつらは入り口に入るときに何をしたと思うかね？」

「「あっ」」

クロとアレスが同時に声をあげる。

「そうか、印をつけたんだ」

「一度入った入り口にまた入らへんように」

「それがどうしたのよ。当たり前のことじゃない」

クロとアレスは「まだわからないの？」みたいな顔をしている。

「ぐはっ」「けぺっ」

不意打ちで顔面を蹴る。どいつもこいつもむかつくわね。

「あ、あの。こういうことでしょうか・・・」

「なによ、いたのアンタ」

「ひう・・・」

久しぶりに口を開いたナワエはすぐに縮こまってしまふ。

「ああああもう、かわええなあ〜ナワエちゃんはああ!!!!」

「はう・・・あ、あの、はなしてください・・・」

「で？何かわかったんですか、ナワエさん」

クロがアレスを殴ったことによつて抱擁から解かれたナワエが自信なさそうに話し出す。

「そ、その、印がある入り口は全部一回通られているんですね。みんな行き止まりだったから」

「そやね」

「だ、だから印がない入り口が正解の道なんじゃないでしょうか？」

クロside

おれたちはすぐに何も印のない入り口を見つけることができた。

けっこう進んでいるのだがいまだに通路が続いている。

「なあ、魔物ってどんなのがいるんだ？」

「ん？どしたん急に？」

いや、ひまだし。

「今後のためにもいろいろ知りたいんすよ。知ってることだけでい

いから教えてくれないっすか？」

「まあ魔物って言うてもいろいろなのがいるわね。獣族、鳥族、蟲族、龍族、精霊族あたりが代表的ね。高位の魔物は言葉を話せたり魔法を使えたりもするわ」

ふうん。でもなんでわざわざヒスイが解説してくれるんだろう？アレスさんに聞いたのに。

「あ、あれはなんですか」

ナワエさんが指差す方向を見るとなにやら半透明のぶよぶよした物体が近づいてきている。

「焰!!」「常闇!!」

おれとアレスさんはヒスイとナワエさんの前に出て魂の欠片を顕現させる。

「ハッ!!」

最初に動いたのはアレスさんだった。

常闇でゾルゲル運動をしながらうごめいている魔物を斬りつけた。

魔物はあっけなく真っ二つになる。

「!?!? なんか、手ごたえのない・・・」

確かにそうだ。

おれもさっきからこの魔物を斬りつけているが、魔物はまるで腐った杏子のようにもろい。

「あ、あの、それはおそらく『スライム』です」

「スライムって・・・あのスライムのことかね!？」

どのスライムだよ。いいから早く説明してくれ。

「スライムはめったに発見されない希少な蟲族の魔物よ。そいつらは倒しても倒してもすぐに再生するわよ」

なんと!？

背後を見るとさっき倒したスライムがぐによぐによ動いてもとのかたちに戻っていく。

まあかたちがあるといっても口くらいしか見当たらないけど。

「なんや、無敵やんか!?! なんか弱点とかあらへんの?」

「す、スライムに関してはあまりよくわかっていないのですが、どうやら火属性の魔法に弱いそうです」

「ヒスイ、ダニエル、ナワエさん、誰でもいいからなんか火属性の魔法を出してくれよ!」

「『スネーク・ファイア』!!」

バガン!!

だめだ。ヒスイがやると爆発するんだった。

「ダニエル!」

「すまないクロ。僕は土属性の魔法しか練習してないから土しか使えない」

ほかのも練習しとけよ!!

「わ、わたしもやるとヒスイちゃんみたいに爆発しちゃうから・・・

」

片鱗の主人はみんな魔法が苦手なんだろうか。

おれたちがこんなことをしている間にいつの間にかスライムがたくさん集まって来た。

スライムが現れた。

スライムが現れた。

スライムが現れた。

スライムたちは集合し始めた。

スライムは集まり、キングなスライムになった。

キングなスライムは体長がさっきとは比べ物にならないくらい大きい。

通路は五メートルくらいあるのだろうが、キングなスライムは軽がかんでいる。

・・・やばくね？

XV 印×魔物Ⅱキングなスライム（後書き）

タ「こんにちわ、最近なかなか勉強が出来ていないタクミンです
^今回は大事なお知らせがあります」

ナ「な、なんでしょうか」

タ「まず更新が遅くなってしまったことを謝ります。すいませんでしたm（――）m」

ク「それで大事なお知らせですが、これから『無の片鱗』は毎週金曜日に定期更新とします。タクミンは今受験生であり、勉強しなければならぬのです。そこらへんはご理解を得られるとうれしいです」

タ「もし時間があつたら一日に数話更新したいと考えています。これから『無の片鱗』をよろしくお願いします^^で次回予告です。秘密の部屋に現われた魔物スライム。クロたちはこいつをどうやって攻略するのでしょうか？さらに新たな敵も・・・お楽しみに！」

XVI 錬金×爆発Ⅱ盗人（前書き）

ク「ウオオオオオオ！おれは靴下フェチなんかじゃねえええええ！
！！」

ア「クロくん！？急にどないしたん？」

ク「詳しくはあとがきで！！！！」

XVI 錬金×爆発Ⅱ盗人

クロス side

「くそっ・・・」

さっきから何度斬りつけてもこのキングなスライムはやられない。

今はおれとアレスさんしか狙ってきていないが、もしヒスイたちまで狙われるとどうしようもなくなってしまう・・・

そういつてる間にキングなスライムは大木のような腕を振り下ろしてくる。

単調な攻撃だかららくらくかわせるな・・・

「クロくん！！下気をつけえ！！！！」

「え？」

ネチャ・・・

嫌な音がして下を見るとネバネバした何かがおれの足にまとわりついていた。

「ちょ！？何コレ！！！？？」

「『ネバー・トラップ』や。水系統の魔法で効果はみたまんまや。たぶんスライムがつかったんとちゃう？」

そういえば高位な魔物は魔法も使えるんだっけ・・・

隙が出来たおれにキングなスライムは容赦なく襲いかかってくる。

「ちくしょー!!」

おれは焰を持っていないほうの手で攻撃を止めようとするが、キングなスライムの腕止まらなかった。

おれの手を避けて腕が変形し、おれを包み込んできたのだ!

「がつ・・・」

外傷はまったくくないものの、スライムの半透明の体がおれの体内に入り込もうとしてくる。

「くそっ!!」

アレスさんも必死にスライムを斬りつけているが意味はない。

ああ・・・こんなところで死ぬのかよ・・・

「『モール・ホール』!!」

これを救ってくれたのはダニエルだった。

その呪文により、おれの足場だけ残しまわりに穴が出来る。

スライムの腕は本体であるキングなスライムから離れていたため、その穴にあっけなく落ちていった。

「た、たすかった」

「全然構わんよ。僕は土属性の魔法に関しては学園の誰よりも強いと思ってるからね」

よかったよ、まだまともな魔法使いがいて。

「・・・あつ!!」

「どないしたクロくん？」

これなら・・・キングなスライムを倒せるかもしれない・・・

「ダニエル、『鍊金』でまわりの土とかをできるかぎり油にしてくれないか？」

「ん？まあ構わんが・・・『鍊金』!!」

ダニエルがそう唱えたあと、いつせいに地面が光り出す。

そしておれたちがいたところもあわせ、ほとんどが油に変わった。

「アレスさん!!おれに向かって思いつきり常闇を振ってください!!」

「OK!!何やるかしらへんけど、任せたで!!!!」

「ダニエル！ヒスイ！ナワエさん！悪いけど、自分の身は自分で守ってくれ！！！」

ヒスイが「えっ？何よ急に」なんて言ってるけどもうアレスさんは常闇を振り下ろしていた。

「『バリア』を使え!!!」

そういいながらおれは常闇を焰で受け止める。

キンツ！！

金属同士がぶつかり合い、甲高いおとともに火花が飛び散る。

バガーン!!!!!!

その火花が大量の油を発火させて通路中にいきわたる大きな爆発が起こつた。

「ぐんぐんいーいーいーいーいーいーいーいーいー！？！？？」

キングなスライムはそんな悲鳴を上げたあと、一瞬で蒸発した。

ダニエル
side

「なんでスライムはあれで倒せたんだ？」

確かスライムに有効なのは火属性の魔法だけだったはず……

「ああ、スライムが弱いのは単に火属性の魔法ってことじゃなくて、熱だっと思ってただけだよ。」

ふむ、なるほど。

確かにぶよぶよしてるし、熱があつたら乾燥して消えてしまいそう
だ。

まるでナメクジだな・・・

ああ、それにしても・・・

クロの役に立てた！！！！

今の僕にこれほどうれしいことはない！！

「ったく！！それやるにしてももうちょっと待ちなさいよね！！」

「ぐはっ！？いたい！！いたいってば！！」

バリアをはるのがワンテンポ遅れたため服が少し焦げてしまったヒ
スイがクロをけりまくっている。

まったく・・・

「かわいそうじゃな」アンタは黙ってなさい！！！！」「うぎゃっ！」

ひどい！？せめて最後まで言わせてっ。

僕はヒスイのけりによつて飛ばされた（ほんとに女の子なんだろう
か？）の다가何かに優しく受け止められる。

「大丈夫かしら？」

「ああ、すまんね・・・」

ん？今の声は明らかにナワ工先輩じゃないような・・・

振り返るとそこにはうさどおりに真つ黒なローブをまとい、フー
ドをかぶつて顔が見えない『奴』がいた。

「き、きききき、キミは・・・」

思わず声が裏返ってしまう。だって・・・その『奴』は・・・

最後までいえなかった僕の変わりにその盗人は自己紹介した。

「はじめまして、わたしの名前は怪盗シルフだ」

XVI 錬金×爆発Ⅱ盗人（後書き）

タ「こんにちわ、友達がアメリカにホームステイすると聞いてうらやましがっているタクミンです^^」

ア「んで？冒頭のあれはなんなん？」

ク「ああ、あれな・・・実はこの前ウォーズさんの「僕の隣の座席はドラゴンです」に出させてもらったんだけどさ・・・」

ア「よかったやないか^^自分も御呼ばれたかったわ」

ク「そこでおれがものすごい変態なんだよ・・・靴下大好き人間・・・」

ア「え？そうやないの？」

ク「ちげえよ、ありえないっつーの。ま、とにかくこんなまじめなおれでもおもしろくされてしまった「僕の隣の座席はドラゴンです」をよろしく願います」

ア「宣伝はしとくんやね・・・」

タ「なんか全然おれがしゃべってない気がするんですけど・・・（ここくらいしか出てこれないのに・・・）では次回予告です。ついにクロたちの前に現われた怪盗シルフ。その目的とは？お楽しみに！！」

XV E I シルフ×頼み〓開戦 (前書き)

ほんとにひさしぶり・・・

感想だれでも書き込めるようにしたんで、気軽にねがいします

^^

XVII シルフ×頼みⅡ開戦

クロス side

怪盗シルフってあのダニエルが朝言ってた・・・

でも女の人だったんだ・・・

「わたしにはよ、目的があんだ。たぶんあんたらの目的と一緒にでさ、これから先は同行させてほしいんだが・・・いいか？」

口調は女じゃなかったな・・・

それに許可を求める感じの言い方だがおそらくおれらを利用するだけして、お役ゴメンのつもりなのだろう。

「シルフちゃん」

「ちゃんゆうな」

アレスさんは女性はみんなちゃん付けなんだろうか？

「自分、女の子にはめっちゃ優しくすんねんけど、嫌いなタイプにはけっこう冷たくなれるクールなやつなんよ」

「それがどうした？」

「アンタはタイプとちゃうわ・・・遠慮なくいこか！！！！」

アレスさんがそういい、走り出した。

「常闇!!!!」

アレスさんは地面を勢いよくけり、思いっきりジャンプする。

そのまま常闇がシルフを真つ二つにするかと思われたが……………

「バカヤロウ!!そんな攻撃くらうかよ!『ストーム』!」

シルフが唱えた魔法により、シルフを中心に暴風が吹き荒れる。

アレスさんは空中にいたので踏ん張れなかった。

常闇はあと少しのところでシルフに届かなかった。

おれは踏ん張ることが出来たので少しあらずさる程度だった。

ヒスイたちはお得意の無属性魔法『バリア』を張っていたため無事だった。

でも今の魔法は『ストーム』なんだよな……

前にレオナンドに『ストーム』をくらったときはなんともなかったのに……

今の風は台風並みの風だった。

やっぱりこいつは強いってことか。

「『どういうことだよ?あたしの『ストーム』受けてあんだけしか吹

き飛ばされねえなんてよ。普通なら岩でもぶっ飛ぶんだぜ?」

しまった!!

いつのまにかおれの前にはシルフがいた。

「んじゃちよつと強めにいくかあ? 『ウインド・スピア』 ああ!!」

シルフの持つ杖の周りにものすごい量の空気が密集し、大きな槍み
たいな形になった。

あれはくらったらやばい!!……がもう目の前にいるため、完全
に避けることは出来ないだろう。

「くそっ!」 「くらいやg」 『ファイア・ボール』!!」

ヒスイの声とともにおれとシルフの間に爆発が起こる。

魔法自体は失敗したみたいだが、助かった。

「なんだあ? 今の?」

しかし今度はヒスイがシルフに狙われる。

くそっ! 今の爆発でおれもふつとばされたから……間に合わない!

「『ストーン・ハンド』!!」

しかし突然現われた大きな手がシルフの体とガツシリ捕らえる。

「僕もいることを忘れてもらっては困る」

おおっ！！ナイスだぜ、ダニエル！！

あいつ、けっこう戦力になるんじゃない？

「ちっ、動けねえ、くそが！！」

シルフはなんとか抜け出そうとするが岩の手は微動だにしない。

「今のうちや！！クロくん！！」

XV E I シルフ×頼みⅡ開戦（後書き）

タ「お久しぶりです、タクミンです^^」

ヒ「ほんとに久しぶりね・・・一ヶ月もさぼっちゃって!!」
タ「う・・・」

ヒ「しかも今回の話、もうちょっと長かったはずでしょ？何で二部にわけてんのよ?!?!?」
タ「・・・・・・・・」

ヒ「しかも宿題やら勉強やらさぼっちゃって。どういうつもり？」
タ「黙秘権をこうs「うっさいバカ!!」「ドゲフツ!？」

ヒ「別に一ヶ月も出番がなかったから寂しいっていうわけじゃないけど、もうちょっと更新しなさいよね!!」

タ「（あ、ツンデレだ）何回もお詫びしますが、本当に、何ヶ月も更新できそうにないんですよ・・・でもでも、受験おわったらほんとにいっぱい更新しますんで、見守ってください。でわ次回予告です。でも時間がないので、早めにさせていただきます。シルフとの戦いもけっこう熱くなってきました!!クロは止めをさすことができるのでしょうか？お楽しみに!!」

XVIIII 峰打ち×加勢〓石版（前書き）

やっと終わったあああつあああ!!

XVII 峰打ち×加勢Ⅱ石版

アレスside

「ちよつと、クロは大丈夫なの？」

クロくんがシルフに突っ込んでいく姿を見てヒスイが心配の声をあげる。

「クロ、血が見れないんでしょう？勝てないじゃない！」

「ヒスイちゃん、心配するのはわかるねんけど、クロくんは大丈夫やで。三日間、自分が

みっちり鍛えとったんやから」

そう、クロくんが覚醒して焰を扱えるようになったあの日から三日間、ろくに寝ずに「峰

打ち」の修行をしていたのだ。

人の弱点となる箇所は全て教えたし、そこを正確に狙う実践も行った。

だから勝てる、はずなのだが・・・

クロくんはシルフの鳩尾を狙ってるようだった。

焰の柄をものすごい勢いで突き出す。

しかし・・・

シルフは（フードで隠されてよく見えないが）笑みを浮かべた。

そして次の瞬間、クロくんの攻撃が当たった瞬間に、シルフの体が霧となって霧散したのだ！

「んな！」

「へっ、残念だったなあ！せっかく手加減で気絶させよーとしてくれちゃってみたいだ

けど？わたしの『ミスト・ボディ』には効かなかったなあ！」

「なんだよ、そんなん無しだろ！？」

「へっ、不可能を可能にするのが『魔法』だ！このクソガキ！」

しまった。ワシはずっと魔物と戦ってきたから魔法使いとの戦闘経験がほとんどない。

ミスってしまった。

「ハハハハハハ！んじゃそろそろぶっ殺してやろうがあっ・・・」

シルフが殺人予告をする前に、シルフの体を風の矢が貫く。

「動かないで。動いたら今度は肩だけじゃ、済みませんよ？」

後ろを振り向くと、そこには杖を構えたアン・ヤシロ先生がいた。

ナワエside

「アン先生！」

ヒスイが歓喜の声で先生の名前を呼ぶ。

「ちいいいい・・・まだ仲間がいやがったのか・・・クソッ！」

そういつてシルフは何かの呪文を唱え、逃げていった。

一気にみんなの緊張の糸が切れる。

「まったく、あなたたちはこんなところで何してるの！」

「先生こそ、何しに来とんのや？」

・ ア、 アレスさん、助けに来てくれた先生にそんなこと言っちゃ・・・

「わたしはクルムーン先生におもしろそうなことを聞いて・・・もしたらあなたたちがいい

たからびつくりしたわ。で？あなたたちは何でココに？」

「先生と同じや。宝石が目的なんや」

先生は少し驚いたがすぐに元の表情に戻った。

「まあいいわ。この調査が終わるまでなら、あなたたちも付いてきてもいいわよ。今下手

に返しても、さっきの女に襲われかねないしね」

なるほど。確かにそうだ。

さ、さすが先生・・・冷静に状況判断できてすごいなあ・・・

「とりあえず、行きましようか。みんな、立てる？」

生徒のことを第一に考えてくれるアン先生は私の目にはとても輝いてみえました・・・

アン先生は、私の目標・・・そう呼ぶに値する教師だった・・・

「で、進んだはいいんだけど、何コレ？」

おそらく今ココにいる全員がクロさんと同じことを思ったでしょう。

新しい部屋に入った瞬間、変な形をした石版の魔物が、天井から落ちてきたんですから・・・

「でも・・・」

「そやね・・・やるしかあらへんよ!!常闇!!」

「ですね!とりあえず、倒しちゃいましょう!!焔!!」

二人の声と同時にまばゆい光を放ちながら、二人の獲物は出現するのでした。

XVII
峰打ち
×加勢
II石版
(後書き)

タ「お久しぶりです、タクミンです^^」

ク「ほんとに久しぶりだよな、俺らが動くのも」

ア「そやね、で？肝心の入試はどうやったんや？」

「タ・タ・タ・タ・タ・たぶん、落ちた。」

[illegible]

「タ、今年は簡単だったみたいで、ボーダーラインが……」

ク「ま、まあまだ結果が出て訳じゃないんだから、そう落ち込むな
って」

ア、「（なんか話題変えへんと・・・）そ、そや！タクミン。なんか自分、中学卒業　前に友達に変なもん配ったやんけ。あれな
んや？」

ク「アレスさん、あれ、この小説の宣伝ですよ。ちゃっかりしてるな、タクミン^W」

「いや、なんかさ？せつかく六十五億分の一の確立で出会えたんだから、何かしらのかたちで、みんなの心に残ってたくて・・・」

ア「タクミン……」

ク「悪い、ただアクセス数増やすためにやったのかと……」

タ「（いや、それも少しあるんだけど……）ま、いつかwwでわ次回予告です！ クロたちの前に現われた、新たな試練！ 変な形の石版の魔物にどう立ち向かうのか！！お楽しみに！！」

XIX 正解×宝石Ⅱボス

クロside

斬る。ひたすら斬り続ける。

しかし目の前にいる石版のゴーレムは倒しても倒してもどんどん出現してきた。

しかも床がデコボコしていて戦いにくい。

正直、やばいと思う。

いくら俺とアレスさんが片鱗で、ゴーレムを倒すのが楽勝だったとしても、終わりが見え

ない戦いは精神を消耗させる。そして、いつかはやられる。

くそ、なんか打開策はないのか・・・

「アレスさん、アン先生、大丈夫ですか？」

「これくらいならのお・・・でも、これはあかん。やばいで・・・」

「確かにね・・・なんとかしないと」

当然アレスさんやアン先生も同じことを考えているみたいだった。

「ダニエル、ヒスイ、ナワエ先輩！どこかに出口がないか探してく

れ！」

「わかったわ」「は、はい！」

しかし、ダニエルが動かない。

「ちょ、ダニエル!？」

俺がゴーレムを斬りながら話しかけても、反応してくれない。

どうやら何かを考え込んでいるようだった。

そして、次の瞬間……

「わかったあああああああああああああ!！」

ダニエルの大声が部屋いっぱいに響いた。

「なんや？何がわかったんや？」

「いや、なに……この部屋の攻略方法がね……」

「かつこつけへんでええからさっさと説明してくれへん？」

「すみません……」

少しダニエルがかわいそうに見えたが、まあ、いいか。

「このゴーレムたち、変な形をしているだろう？そして床も変な形をしている……クロ、

試しにゴーレムの一体を床の穴に押し込んでみてはくれんかね？」

「わかった！・・・おらっ！」

俺は近くにいたゴーレムの腕をつかむと床に叩きつけるようにして穴に押し込んだ。

すると、どうだろうか。ゴーレムが穴にぴったりはまって動かなくなっただけではないか！！

「なんや、種がわかれば楽勝やね」

「まあ、それに気づくのが難しいのでしょっけど・・・よくやったわダニエルくん」

アレスさんや、アン先生もすぐにゴーレムを穴に押し込む作業を始めた。

おそらく、全ての穴にゴーレムをいれたら、この部屋はクリアしたことになるのだろう。

「やっとおわったのお・・・」

アレスさんが最後の一体を穴に押し込んだとき、壁が動いて、次の部屋への通路が現われた。

た。

まだまだこんな頭を使う部屋があるのかと思うと少し憂鬱だが・・・

「よし、いこうか！」

しかし、そんな心配は無用だった。

次の部屋の真ん中にあったのは、燃えるように輝く、真紅の宝石だった。

そこにいるみんなが息を呑むのがわかった。

その宝石はまるで本物の炎のような輝きだった。

それもすごく温かい、優しい炎。

俺たちはみな、宝石にしばらくの間、魅せられていた・・・

アレスside

なんや、あれ・・・

あれが自分がずっと欲しがってたものかいな・・・

正直、予想以上の価値がありそうだった。

何も、売るために探していたわけではないのだが・・・

「あの女が来る前にとつときましよう。横取りなんかされたらたま
んないわ」

「そうね・・・でも何かまた罠があるといけないわ。わたしがいき
ますね」

「え、でもアン先生、俺が行きますつて。俺ならトラップきかない
だろうし・・・」

「いけません。あなたもわたしの生徒です。わたしが守ります」

目の前で軽く熱血教師ドラマが繰り広げられたあと、アン先生が宝
石に手をかける。

「やっと・・・これなら、もしかして・・・」

先生はそうはつきりいったあと、何かをつぶやいた。

それは常人には到底聞こえないほど、小さい声だったが、片鱗である自分とクロくんには

聞こえたはずだ。

「っ、クロくん!!」

「わかってます!!!!!! 焔!!」

クロくんは焔を顕現させ、アン先生を攻撃する。

「ちょっとクロ!! なにやってんのよ! 先生! 大丈夫ですか?」

「あかん、ヒスイちゃん!! そいつに近づくんやない!!」

次の瞬間、強い敵意を感じた。

アン先生は・・・やっぱり・・・

「ハハハハハ、なんだよ、結局ばれてたのかよ! うまくいけてたと思ってただけだよ?」

「怪盗シルフ!!」

アン先生はやはり、シルフだったのだ。

「せつかく、『分裂』で作ったわたしの分身まで殺したのによお！ま、いいわ。目的の宝

石は手に入れたんだs・・・っ！！！？ちい！！！！」

そこまで言ったとき、シルフが何かに驚いてた。

そして地面から何かが出てきた。ちょうど、シルフの真下から。

シルフはこれに気づいていたのか、横に飛んだが、そのなにかに捕まれて身動きが取れない。

くなってしまったようだった。

その何かはとても大きかった。

樹木の太い幹みたいな体をしている。

人のようだが上半身しかない。目の部分は布で覆われていてみえない。

その化け物の右腕にシルフは捕まってしまったのだ。

「な、なんだコイツ！！」

「クロくん、きつとこいつが今回のラスボスや・・・倒すで？」

XIX 正解×宝石Ⅱボス（後書き）

タ「こんにちわ、タクミンです^^さつき144分の1のシナンジ
ュ作りました」

ヒ「なによそれ？」

タ「ほら・・・わかるだろ？ガン普拉だよ、ガン普拉！あれを作っ
てるときは本当　に楽しいなあ・・・」

ヒ「ふーん、ところで、あんたらの趣味って何？」

ア「ワシの趣味は、やっぱりナンパやね！！女の子と話すんは最高に
楽しいわ」

ヒ「（ただの変態じゃない・・・それとも男はみんなこうなのかし
ら？）」

タ「俺も女の子とおしゃべりするのは好きだな、うん・・・てこと
で次回予告です！！突如現われたラスボスっぽいの！！クロたちは
こいつに勝てるのか！？そして宝石は誰の手に？お楽しみに！！」

XX 100回失敗したなら×小学校で習わなかったのか?」意図

ナワエ side

今わたしの前に広がる光景は今までに見てきた戦いの場とはまったく違っていました。

今まではアレスが負けることなんてなかった。

学園でみんなに気づかれないうにわざと負けててくれていたときとも違う。

そのアレスが目の前でとてつもなく大きいゴーレムにまったく敵わない……

「っが!!」

「アレスさん!? 大丈夫ですか?」

「っ……問題あらへん。しかし強いのお、こいつ」

「ええ。しかも……くっ」

会話をしているクロさんたちにも容赦などしません。

さつきからアレスもクロさんも何度かあの化け物に斬りつけてはいるのだが、驚いたことに斬った腕が数秒でまた生えるのだ!

ダニエルくんもがんばってる。なのに……

わたしは魔法が使えない役立たずだ。

無属性魔法は使えるとは言ったが、ほとんどの無属性魔法は主に生活に役立つものばかりなのだ。

お世辞にも戦闘向きとはいえない。

だからわたしはこんなときには黙って見ていることしかできない・

「『スネーク・ファイア』!!」

バゴ~~~~ン!!

隣で爆発音がしたかと思うとヒスイさんが魔法を唱えて失敗したみたいだった。

「むっ・・・『スネーク・ファイア』!!」

バゴ~~~~ン!!

何度やっても同じだ。なのに・・・なんで!!

「ヒ、ヒスイさん!わたしたちは魔法が使えないんですよ!あ・・・足手まといになるだけです!」

「それでも何もしないなんて絶対にいやだわ」

「!・・・」

「確かにわたしは魔法が使えないわよ。ええ、そうよ!へたくそよ!落ちこぼれよ!!でもそれがなん

だつていうの?料理ができないなら練習しちゃダメ?魔法が使えないから努力しちゃダメ?仲間がピン

チなのに助けようとしちゃダメ?」

「・・・・・・そ、そんなわけ・・・・」

「ならアンタもなんかしなさいよ。わたしはこれしか思いつかなかったけど、魔法意外トップクラスの

あんたならもつとなんかできるんじゃないの?」

あつ、わたしのことただの落ちこぼれだと思ってなかったんですね・・・・

でも・・・・ヒスイさんの言うとおりですね。

じつとしているのは・・・・もう嫌なんです!!

「『スパーク』!!」

ジユドガーン!!

やっぱり失敗はしてしまうみたいですね・・・

でも、100回失敗したなら101回がんばればいいだけです！

「なによ、わたしのマネしないでよ」

そんな不満をいいながらもヒスイさんは笑っていました。

クロside

くそ・・・冗談じゃねえぞ・・・

この怪物、さっきの石版のゴーレムよりはるかにでかくせして、しかも再生能力つきだと？

「おらぁ!!」

何も打開策を見つけれないため、ひたすら斬る。

こいつの体は木できているみたいだから血はもちろんない。

とりあえず、最優先すべきなのは……………

「ガアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

「っそんな大振りな攻撃、あたらないぜ!!」

俺はゴーレムの左でのパンチを軽くかわし、その逆の腕、つまり右手に着地する。

そつ、怪盗シルフのいるところに。

「ほら、早く!!」

「っけ!そんなふうに手を差し出したってこの宝石はわたしやしな
いぜ」

・・・あきれた。

心の中でため息をつきながらもう一度手を差し伸べる。

「じゃなくてさ、俺の手、つかめよ」

「・・・え?」

「ちょっと痛いけど、そこから出してやる」

「ちょ・・・ちょっと待てよ!」

「?」

「お前、あたしを助けるのか?」

「?あたりまえだろ?何聞いてんだよ」

「はあ?ばかじゃねえの?あたしはお前らをマジで攻撃したし、だ
ましたんだぜ?偽善者気取ってん

な!!さっさとあたしから宝石奪って逃げりゃいいじゃねえか!!」

アレ?宝石とって欲しいの?

まあ、いいや。そんな質問答えなくてもわかると思うんだけど・・・

「あんた、小学校で習わなかったのか？困ってる人がいたら助けてやれって」

「・・・・・・けっ！そうかよ！」

ふう・・・やっとなをとってくれたか・・・

「おい、お前、クロとかいったか？」

・・・なに？やっぱ覚えてなかったわけですか？

「そう。もはや漢字で呼ばれてない気がするけど、柳川 黒 十六歳だ」

「・・・クロ・・・これはお前に預けるぜ」

「おっとつと。っておい。いいのか？」

シルフから渡されたのは宝石だった。

「こいつはこれを取った途端出てきやがったんだ。元の場所に戻しや、なんとかなるかもしれねーだろ

ーが」

なるほどね・・・んじゃ。

「ヒスイ、パース!!」

「!?!?バカか!!あの子はてめえと違って強くねえんだぞ!さっきから魔法を失敗しまくってる!!」

・・・やっぱこの人、悪い人じゃないわ。

さすが先生、というべきなのかね?

「クロ!!受け取りなさい!!」

っておい!!

まだ渡してから10秒もたたないうちに帰ってきたよ?どういう神経してんだろ?

しかし宝石を受け取ってからその意図がわかった。どうやら・・・この宝石は俺とヒスイのためにあったようだな・・・

XX 100回失敗したなら×小学校で習わなかったのか？〓意図（後書き）

タ「こんばんわ、タクミンです^^今日も元気にトークやりたいんですけど、今から夜飯作るんで、今日は勘弁！！でわ！後は任せた
！！」

ク「っておい！タクミン？・・・まあいいか。次回予告です！俺が気づいたヒスイの意図とは？そしてVSボス戦はどうなる？お楽しみに！！」

XXI 記憶×炎Ⅱ終局

ヒスイside

「ヒスイ、パース！」

え？ちよ、ちよっと！魔法打ってる（当然失敗）途中で投げないでよ！

そうは思いながらもしつかりとキャッチする。

まあ元々ゴーレムはわたしたちのことを気にはかけてなかったみたいだから何の邪魔もなく受け取れた。

なるほど。これを元の場所に戻せていうのね……………

「ナワエ！これをもって、あのっ！！！！？？」

「ど、どうしたんですか、ヒスイさん？」

わたしが宝石のおいてあった台座の方を向いたとき、不思議な感覚が私を襲った。

頭の中に膨大な量の情報が入ってくる。

いや、情報と言うよりは、人の記憶。

誰かの生きた証がわたしの中に入り込んでくる。

そして、気づいた。今何をすべきかを。

「クロ、受け取りなさい！」

クロに向かって宝石を全力で投げる。

当然クロは最初は慌てるだろうが、もう心配はいらない。

クロが宝石を受け取ったときから、わたしはもうこの戦いが終わることを確信していた。

ク ロ s i d e

宝石からさつきとは違った反応が見られる。

宝石は俺の手の中でさつきよりもはるかに紅い輝きを放っている。

そして、俺の体をその光が覆う。

ああ、そういうことか……

俺はそうなのか。そういう存在なのか……

たくさん、いろんなことがわかったわけではない。

ただ、宝石から自分が何か、どんな力を持っているかを教えられた。

ゴオオオオオオオオオオ！！！！！！！！！！

俺の体から炎が一瞬飛び出す。

それによってゴーレムの手が焼け落ち、シルフが開放される。

「って・・・何だあ？何が起きやがった？」

「簡単なことですよ。俺が俺を理解したっていう・・・」

俺も地面に降り立ち、ヒスイを見る。

その目はいつもどおり、強気だ。

「クロ、存分にやっていいわよ」

「了解だ！俺の主人様！！」

ゴーレムに向かい直る。

ゴーレムは俺たちに向かって手を伸ばしてくるが、もう何も怖くない。

もう負ける気はしない！！

「はあああああ！！！！！！！」

焰を全力で振り下ろす。

そして焰から同時に大量の量の炎の塊が飛び出る。

「ギャオオオアアアアアオアオアオ！！！！！」

ゴーレムは木できていた。だから炎の攻撃をくらって無事でいるはずは無い。

これで終わっただろう。少しだけ、あつけないとは思ったが、これでもうアイツは体を焼かれるしか道はない。

そして俺はゴーレムに向かい、俺の勝利を高らかに宣言する。

「この俺、炎の片鱗、柳川 黒の勝ちだ」

XXI 記憶×炎Ⅱ終局（後書き）

タ「・・・こんにちは、タクミンですう・・・」

ク「！？おいおいどうしたタクミン？失恋でもしたのか？」

タ「いや、そこまで悲しいことにはなっていないよ！？いや、実はさ、昨日鍋作っただわ」

ク「まあ寒かったしな。それがどうかしたのか？」

タ「いや、いつのかにか鍋の汁が五分の四くらいなくなっててさ」

ク「！？何、蒸発したの！！??」

タ「うん・・・だから少しだけ落ち込んだw」

ク「少しくらい料理できるようになっとけよ？タクミンが一人暮らししたとき困るぞ？」

タ「そだね、修行はちゃんとするよ」

ク「きつと御飯つくりにくてくれる彼女とかできないからさ」

タ「うるさいなお前！？泣くよ！？泣いちゃうよ！？というか泣いていいかな！？・・・まあいいや。次回予告です。自分の正体を知ったクロ。自分が何たるかをみんなに告白する。そしてシルフの目的とは？お楽しみに！」

XX? 炎の結晶×目的「希望」

アレスside

目の前で木のゴーレムが焼け落ちていく。

あんなに苦戦したのにクロくんは一撃で倒してしまった。

「でもどうしたん、急に？さっきまでそないな力なんて持つとらんかったやろ？」

「なんですかね、なんかこの『炎の結晶』に触ったら俺の力の使い方が全部わかったんですよ」

「わたしもビックリしたわ。クロからこの宝石を受け取った瞬間、全てがわかつちゃったんだもん」

「す、すべてってなんですか？」

「まあいろいろあるんだけど、この迷宮は前の炎の片鱗、つまりフィナゼルの魂獣が次の片鱗の修行になるように作った場なのよ」

「『炎の結晶』には片鱗の力が封印してあったってわけだ。『このくらいの障害は乗り越えないと片鱗の力はやらんぞ』って言いたいんだろうな」

なるほどのお・・・昔の人もけっこう厳しいんやね。

・・・ちよつと待ちい。ほんならもしかして……………

「なあ、その宝石ナワエちゃんにも持たせてくれへんか？もしかしたら自分もなんか変化があるかもしれへん」

「そうですね、じゃあ、ナワエ先輩。どうぞ」

そう言つてクロくんがナワエちゃんに炎の結晶を手渡す。

・・・・・・・・・・・・・・・・

「」「」「」・・・・・・・・・・・・・・・・「」「」

「」

なにもおきない。

「やっぱりこれは炎の片鱗専用だったみたいね」

「まあ炎の結晶っていうくらいだしね」

そこは予想しとったし、あんまし期待しとらんかったから別にええわ。

今の問題は、こつちや。

「さて、シルフちゃん。ちょっと前に言つてたあんたの目的ってなんや？」

「え？おれらと同じ、この宝石じゃないんですか？」

うーん、やっぱり子供らにはわからんか・・・・・・・・

よく考えると二十歳超えとんのってシルフちゃん抜いたら自分だけやね。

「たぶん違うで。もしただ宝石が欲しいんやったら、なんで今奪わんのや？別になんかで縛ってるわけやないんやで？」

そう。ただの怪盗なら宝石盗んでドロン（忍者か！）や。

なのにシルフちゃんは宝石をわざわざ返しに来るって話やないか。

別の目的がないとそないな危険なことをするわけがわからん。

「けっ、まあてめえらに助けてもらったわけだしな。そんなくらは話してやるぜ」

なんでめっちゃ上から目線なん？

「実は私もクロやアレスと同じ、異世界から来た人間なんだよ」

クロside

「「「「「んなっ！？」「」「」」」」

その場にいた全員に衝撃が走る。

「おい、どういうことだ？」

もしかしたら夢羽と龍也さんの情報も手に入るかもしれない！

そう思うと体を止めることはできなかった。

「いやな、いつもどおりに働いてたらよ、急に地面から光手が出てきて気づいたらこっちの世界にいたわけよ。だからめえと一緒にだ、クロ」

「どこにいたんだ！！つれてこられた場所はどこだ！！！！つてくはっ！？」

「少し落ち着きなさい！あんたの目的のこともわかるけど、あせってもいいことなんかないわよ！」

ぐぬぬぬぬ・・・確かにヒスイの言うとおりだ。

少し頭に血がのぼり過ぎていたのかもしれない。

「それでこつからが重要なんだよ。この世界では宝石が特別な力を持つらしい。いろんな宝石を

見てきたが金運があがる宝石や建物を一瞬で造れる宝石なんてのもあった。ピンからキリまであるわけだ。

だから最初の片鱗とやらも宝石に力を封じたんだろーな。そこで私は宝石の研究をした。そして1つの

結論が出たんだな」

「ど、どんなですか？」

「この世界には『世界と世界を渡ることのできる宝石』があるってことだ。要するにそれを見つければ

元の世界にも帰れるってわけよ」

なるほど・・・

アン先生は自分の世界に帰りたいから宝石を盗んだんだな・・・

・

でも別に宝石が欲しいわけじゃないから、その『世界と世界を渡ることのできる宝石』以外は返したってことなのか・・・

ドドドドドド！！ガラガラガラガアガラガラ！！！！！！

そこまで話を聞くととてもいやな音が聞こえてきた。

どうやら迷宮が壊れたみたいだ。

「と、とりあえずここを出ましよう！！」

「そないに慌てんでも大丈夫や。たぶん自分らが出るまでは持つで」

アレスさんがそういつてくれるなら大丈夫か・・・・・・・・

今回の迷宮でいろいろ進歩できた。

今まで以上の力も手に入れたし、アン先生からいいことも聞いた。

この力はちゃんと制御できるようにまた修行しなきゃな。

それで、夢羽と龍也さんを助けて元の世界に帰るんだ。

そんな希望を抱きながら俺は仲間たちと共に迷宮を駆け抜けたのだ
った。

XX? 炎の結晶×目的Ⅱ希望（後書き）

タ「こんにちわ、タクミンです^^第一章無事、完結しますた!!」

みんな「イエー~~~~~イ!!!!!!パチパチパチパチパチパチ
!!!」

ク「いやゝ長かったな!」

ダ「何が長いつて休載が長かったからね、少しうれしいというものだよ!」

ヒ「ほんとよね。確か夏休みに書き始めなかったかしら?」

ナ「ま、まあそんなに責めなくてもいいじゃないですか^^タ、タクミンさんも受験がんばったわけですし.....」

ア「あれ?でも授業中この小説のネタ帳いじっとらんかった?」

ク「俺たちのことも忘れてなかったってことにしときましょう!そういうや明日高校の合格発表なんだよな?」

ヒ「ま、せいぜい祈ることね」

タ「ハハハハ.....さて!気を取り直して、いきます!!次回からは第二章 闇の国クスネダ王国 王と龍騎士と姫編です!」

ア「ナワエちゃんの生まれ故郷やね！」

タ「そうです！あ、ちなみにサブタイトルのつけ方も少し変えてみようかと^^お楽しみに！！」

第一話 謹慎と邪鬼と怪しい男（前書き）

更新おそくなりましたm（――）m

第一話 謹慎と邪鬼と怪しい男

クロside

「ほら、クロ。ご飯よ」

「わーい！ありがとって！これ生肉じゃねえか！焼けよ！」

「しょうがないじゃない！そんなもの持っていないだし。それにあんたには肉で十分でしょ？」

うう・・・なんかヒスイがまた冷たい・・・

あれから俺たちは無事脱出することはできた。

できたのだが・・・

上にある図書館まで壊れてしまい、しかも先生方に見つかってなると一週間の自室謹慎をくらってしまった。

ん、でもある意味ラッキーなのかね？

図書館全壊させといて一週間で。

「そうだ、クロ！またあんたの世界の話、聞かせなさいよ」

こういつときのニコニコ顔だったらまだかわいいんだけどなあ」

「そうだな・・・俺らの世界だったら魔法なんて使わなくても肉はちゃんと焼けたんだぜ？ガスつつつてさー」

「ガスって何よ」

「あゝ、つと・・・気体？」

「はつきりしないわね、役立たず！」

えゝそりやねえよ・・・また不機嫌にさせてしまった・・・

あ、そういや俺もヒスイに聞きたいことあったんだっけ。

「なあヒスイ。邪鬼ってなんだ？」

「え！？じゃきつてあの邪鬼のこと？・・・なんでそんなこと聞くのよ」

「なんか前にダニエルたちにお前は邪鬼かーとかいわれたんだけど

「そう・・・あのね、邪鬼って言うのは始祖フィナゼルがその命と引き換えに戦った魔物たちのことよ。邪鬼は聖地って言われるすごいところに住んで、身体能力、魔力が人間と比べてはるかに高いの。見た目は人間とほとんど変わらないしね」

だから間違えられたのか。軽くショック。

でもまあそんなのと戦うことはないだろうからいいかな。

「お、そろそろアレスさんとの修行の時間だ！んじゃあいってくるな！」

「はいはい、いつてらっしゃい。先生に見つからないですよー」

「わかってるよっと！」

ドアは魔法が張ってあるから、出口は窓しかない。

ここかなりの高さがあるけど、まあ俺は片鱗だから大丈夫。

さ、今日も修行をがんばろうかな！

アレス side

そろそろかの・・・？

コンコン！

部屋のドアから音が聞こえる。

「ど、どうぞ」

ナワエちゃんの返事の後、ドアが開けられある人物が入ってくる。

「よう、シルフちゃん」

「ちゃん言つな、バカヤロウ」

そう、怪盗シルフこと、アン・ヤシロ先生だ。

相談、というかたちで謹慎最後の日に来てもらったのだ。

「で？なんのようだよ」

「1つ、頼みっちゅーか取引をしたいんや」

「ほう？なんだ、言ってみろよ」

「自分らに一度だけ力を貸してくれへんか？そうしてくれたらワレがシルフやってことも言わへんし、宝石探しを手伝つたる」

「っは！そんなん私になんのメリットもねえじゃねえかよ。私一人でも宝石は盗めるね！」

はあ・・・バレバレやで？

どうせ、わしらを同じ犯罪者にしとーないとかそないな理由やろーけど。

「この前みたいなきはどーすんねん？あれは自分らがおらんかったら死んどつたで？」

「ちっ・・・気が変わった。てめえらのその力を貸して欲しいことつてなんだ？」

「自分ら二人を交換留学生でもなんでもええ、闇の国の魔法学校ク

「スネダ校に連れてつてくれんか？」

クロス side

「ふう、クロくん、そろそろ休憩しよか」

「ですね・・・」

一時間以上もずっと組み手をしていたからすごく疲れる。

でも夜は涼しいから少しはマシだ。

「そや、クロくん。前から気になっとったんやけど、なんでそないにうまく焔を操れるん？自分は常闇をうまく扱うのにけっこうな時間がかかったんやけど？」

「ああ、実は元の世界でちょっと剣術をやってたんですよ。天音流剣術っていうんですけどね。四つ奥義があるんですけど、1つしか会得できなかったんですよ」

そう、今俺がこうして戦えるのは全部龍也さんと師匠（龍也さんのお父さん）のおかげだ。

小さいころから剣術をやって、しかも本来一人にしか教えない奥義を俺にも教えてくれた。

龍也さんは全ての奥義をマスターしたすごい人だ。

だからこの世界のどこかでももしかしたら戦っているのかもしれない。

「アレスさん、俺なんか食いもんもらってきます」

「おう、はよー帰ってきてな」

「こんばんわ、すみませ〜ん、今日もなにかもらえますか」

声をかけると一人の女の子が出てきた。

「はい、もちろん用意してますよクロさん」

ここは学園の厨房、そして彼女はラチウさんだ。

だいぶ前に修行していたときに食べ物をもらって以来、ずっとお世話になっている。

「いつもありがとうございます」

「いいんですよ、どんどん食べてくださいね」

いつも思うがなんていい人なんだろう！

ヒスイもこんな性格だったらなあ……

「じゃあありがとう……っておい！大丈夫ですか!!」

礼を言って帰ろうとしたとき急にラチウさんが倒れてしまった。

「心配にはおよびませんよ．．．．眠っているだけですから．．．
．．．」

「．．．！？」

声と同時に急に後ろに気配を感じた。

後ろを振り向くとターバン(?)をした男が立っていた。

「誰だ？」

「今は名乗る必要はないので控えさせていただきます．．．それよりもあなたはいい『心の闇』をお持ちですねえ」

「ッガ!．．．．．」

速い!まったく反応できなかった!!

その男は俺の胸に手を入れている。

文字通り、体の中にまで手が入っているのだ!!

「そんなあなた様にこれをプレゼントしておきます．．．いつか実がなるのを楽しみにしてますよ．．．」

くそ、誰なんだこいつは!!片鱗の俺をこつも簡単に．．．

気がつくと男はどこかに消えていた。

あわてて胸を押さえるが怪我は1つもしていなかった。

しかしまだ妙な吐き気が残っていて、アレスさんが駆けつけてくれるまで俺はしばらく動けなかった……

第一話 謹慎と邪鬼と怪しい男（後書き）

タ「こんにちわ、タクミンです^^」

龍「ひさしぶり、天音達也だ。それにしてもタクミン、更新が遅かったな。何かあったのか？」

タ「いや、高校の補習でさ、ちょっとやる暇なかったんだよねw」

龍「そうか。でも今回は少しがんばったな？過去最長じゃないか？」

タ「かもしれない。今日はそろそろ次回予告したいんだけどいいかな？」

龍「・・・まあいい。タクミンもいろいろあるもんな。（今回もまた少ししか出れなかった・・・）」

タ「ありがとう・・・でわ次回予告です！次回からは場面は変わり、クスネダ校となります！アレスとナワエの目的とは？さらに新キヤラも登場！お楽しみに！！」

第二話 風竜と歓迎と龍騎士

クロside

吹き抜ける風が心地よい。

雲が真上にあって手を伸ばせば届きそうだ。

「つて！？あぶばぶばいhfないbsふいb！……！！！」

ほんとに雲の中に入りやがった！

「ちょ！アン先生！やめてくださいよ！？」

「ああ？そんなくらい我慢しろや。もうすぐ着くから」

今俺たちは空を飛んでいる。

といつてもアン先生の魂獣の風竜に乗っての移動なのだが。

「つかシル……アンちゃんもやっぱ魂獣いたんやな」

「（こいつ本名でもちゃんづけするつもりか？）あつこは狭えからこいつは呼べなかったんだよ。こいつけっこうでけえからな」

確かに大きい。

俺、ヒスイ、アレスさん、ナワエさん、アン先生、そしてクルムン先生の6人を乗せても楽そうだ。

「クロくん、今きつと読者は私のことを誰？って思わなかったかな？」

「そんなことないっすよクルムーン先生！大人気ですって！」

一応思い出せない人のために。

第一章で出てきた闇魔法の授業の先生だ。

なんかアン先生にあの遺跡のことを教えたのはクルムーン先生らしい。

今向かってるのはナワエさんの出身国の魔法学校、クースネダ魔法学校だ。

そこで俺たちは交換留学生、というかたちで3週間学ぶことになった。

と言ってもそれは表向きの目的。

本当の目的は、おそらくクースネダにもあるであろう遺跡にある、闇の宝石だ。

それを手にいれてアレスさんもレベルアップしようというのが本当の目的。

この前のような魔物相手では今までの片鱗の力だけでは足りないからだ。

ちなみに交換留学生は二人の生徒（魂獣はもちろん数にはいれないぜ？）、二人の付き添いの教師が必要だということで、影の薄かったクルムーン先生もついてきてくれた、ということです！

「そついやクスネダ校ってどんなところなんすか？」

「自分はよく知らへん。召喚されたんはベレフレム校やからな」

じゃあナワエさんに聞こうか・・・

「私はいったことあんぜ。あつこはなんつか・・・熱烈に歓迎してくれるだろうぜ？」

聞いてもいないのにアン先生が答えてくれた。

にしても熱烈な歓迎か

歓迎パーティでもしてくれんのかな？

それはうれしいな、なんだ、闇の国、なんていうから少しだけビビってたけどいい国っぽいな。

「おつ、見えたぜ。ほれ、中庭にあんなに生徒が私たちの到着を待ってっぜ？」

少し遠くに見える、まるでお城のようところが学校なのだろうか？

すっげー！ほんとお城だ！キャッスルだ！！

うん、ここで友達を作るのもいいかもな！

アレスside

「…………アレスさん、これどついう歓迎なんすかね？」

「ちょっと！アン先生！話と違うじゃない！」

「ククツ・・・ん？私は嘘は言っていないぜ？どうだ、ククツ、熱烈だろ」

中庭に降り立つと周りにいた生徒がいつせいに杖を向けてきた。

もちろん魂獣も殺気むき出しだ。

「クースネダつてのは基本実力重視だからよ、来た途端戦わされるぜ？ま、がんばれよ」

うゝん、見事にはめられたんやね。

うわお、2つ首のコンドルとかでつかいムカデっぽいのもいるやんけ！

これはこれで楽しめそうやん！

「クロくん、いっちょがんばるか！」

「りょーかいです。来い！焰！！」

「さあゝ、処刑の時間や」

きつと自分らには手も足もでーへんやろーけどな。

面白そうな魂獣もいるし、ワクワクやわ！！

???side

ここは高くそびえる塔の中。

そこでもっとも大きな部屋。

今俺がいるのはここ、クースネダの王室だ。

ここからちょうど中庭が見える。

「お前はなんか感じるがあったか？あの留学生」

「いえ、イナス王。俺ならあの二人には負けません」

「ハッ、頼もしいねえ。一分もかからずにウチの生徒を全滅させてんだぜ？」

にやりと笑みを浮かべるその顔から読み取れる感情は、歓喜。

好敵手を見つけたという顔だ。

「それにしてもよお、なんかあの黒髪の刀持ってるやつ・・・お前と同じ感じがすんだよなあ。龍騎士」

イナス王は俺を見て不思議そうに首を傾げる。

鋭いと言うか、たまにイナス王は勘がさえるようだ。

・・・それにしてもようやくきたか、片鱗よ。

待っていた・・・待っていたぞ・・・

長い間な
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

第二話 風竜と歓迎と龍騎士（後書き）

タ「久しぶり！タクミンでッス！最近高校も忙しくなってきたさ」

ヒ「いいわけすんじゃないわよ」

タ「ひどいよ！？でも今日はもう次回予告したいと思います・・・
疲れた・・・」

ヒ「たしかにね。電車の中で寝て、降りる駅を通り越して終点近く
までいっちゃったんですもんね」

タ「ああ、それはいわないで！？はずい！」

ヒ「さっさと次回予告しなさいよ！」

タ「ヒスイが邪魔したん・・・ンギャ！？・・・イテテ（久しぶりに
ヒスイにけられた）じ、次回予告です！クスネダ校に来たクロ
たち。アレスが遺跡を探しにいつている間に語られるナワエの過去。
そしてイナス王、龍騎士は何をたくらむ？次回もお楽しみに！！」

第三話 ナワエと過去と決意

アレス side

あの後主に自分とクロくんで生徒とその魂獣を倒した後（もちろんめっさ手加減したで？）二人の先生は職員室に行き、自分ら四人の生徒（正確には二人の生徒と二匹の魂獣？）は

部屋に向かっている時にシルフから聞いたのだが、クースネダ校は授業の4割に実践を取り入れているほど実力重視の学校なのだそうだ。

確かに魂獣の種類は希少なものが多かったが、やはり最強の魂獣である片鱗には勝てないようだ。

自分が手にいれた大きな力に改めて感心する。

と同時に自分の前を歩く小さな主人を見つめ、今一度この少女を絶対に守り抜くことを決心しなおす。

「そつえばアレスさん、遺跡のありかとかはわかるんですか？」

「んー、それは今から探りを入れる予定やったんやよね・・・そんなでも三週間もあるさかい、ゆっくり探してこようや」

とはいいつつ早く見つけたいのが本音だった。

この前の遺跡での木のゴーレムとの戦い。

もしクロくんが覚醒してなかったら確実に死んでいた。

だから自分もクロくんと同等の力が欲しい。大切な主人や仲間を守れる力が。

「あ、あの・・・私、こ、心当たりがあるんですけど・・・」

「ホンマか!？」「マジっすか!？」

ワシの声とクロくんの声が重なる。

「あ、案内します・・・そ、それと・・・聞いて欲しい話があるんです」

「!!!!・・・ナワエちゃん、あの話をするんか？」

「はい。みなさんにも聞いておいて欲しいんです。もちろんアン先生とクルムーン先生も一緒に」

そう・・・それはナワエちゃんが乗り越えなきゃいけないこと。

そして乗り越えるべきときは、そう遠くない・・・

クロside

長い廊下を歩いていく。

今日は一日目ということで特に授業はないようだった。

というか多くの生徒は今治療中だろうしね。

歩いてる途中でナワエさんがぐるっと振り向く。

何かを決意した目だ。おそらく今から話すことに関係があるのだろう。

「少し、長い昔話をします……といってもまだ12年前のことですが……」

私は部屋にあるお人形で遊んでいた。

この部屋での生活に足りないものなどなかった。

お人形やおいしい御飯、優しい召使いさんにきれいな宝石。

このときはたった4歳の子供だったが、自分が両親に愛されていることは理解できた。

両親に愛されていれば他のものはついでだ、などとも思うほどに私もまた両親を愛していた。

ガチャリ……

扉がゆっくりと開けられる。

そこにいた自分の兄の姿を見て体が反射的に震えだす。

「よお、ナワエ。楽しいか？」

言葉だけならばただの優しい兄なのだろう。

しかしその顔にはあきらかに不快感が出ている。

「あ、あ、あああああああああ！！！！！！」

必死に逃げ出す。今は召使いさんもないからそれしかできなかった。

「までよお、かわいいかわいいナワエちゃん？」

「あうっ」

しかし2つも上の兄から逃げ切れるはずもなくあっさりと追い抜かされ転ばされてしまう。

それからは一方的な暴力だ。

殴る。蹴る。

単純な攻撃だが幼い子供に恐怖を植え付けるにはそれだけで十分だった。

こういうときはいつもやられるがままにしている。

無駄に抵抗したりせず、じっと待っていればいつものように誰かが助けてくれる。

そして同時に思う。

（お兄ちゃんは何でこんなに私のことが嫌いなの？私はお兄ちゃんに何も悪いこと、してないのに！！）

そんな日々に8年間もナワエは必死に耐え、兄の姿を見るだけで気持ちが悪くなり、めまいがするようになっていた。

そして大きな事件が起こる。

恐怖の対象の兄が、いつも兄から自分を助けてくれた母と父を、殺した。

それをきっかけにナワエは身の危険を感じ、逃げるようにしてベルフレム校に転校してきたのだ。

・・・それが、私の過去です・・・」

話し終えたナワエさんをアレスさんが優しく抱き寄せる。

皆聞いているうちは無言だった。

こちらの世界で言う、虐待をナワエさんは受けていたのだ……

・

「そして……今のこの国の王が、私の兄、イナス・ミウリュです・
・もし、兄に出会うことになったら、私一人で……がんばらせて
ください……」

震えながら、小さな声ながらもはっきりとした声で言う。

「こ、ここがたぶん、い、遺跡のあるところだと、お、思います・
」

大きな扉の前でナワエさんは立ち止まり、いつもの口調に戻って目的地に着いたことを伝えてくれた。

第三話 ナワエと過去と決意（後書き）

タ「こんにちわ、タクミンです^^今日図書館に勉強しにいったんだよ」

ク「お、がんばるじゃん」

タ「いや、まあ結局あんまし集中できなかったんだけど、なんか自販機の位置が変わってて、いつも飲んだキリンレモンがなくなってたんだよ」

ク「ありやりや。で、探したんだな？」

タ「だけどさ・・・キリンの自販機がなくなくて、30分くらい探したらやっとあつて！でもキリンレモンがなくなつて！！30分くらいうちよしてたから仕方ない、と思ってスポドリ買ったんだ・・・そしたら図書館に戻るときにキリンレモン売ってる自販機二個も見つけた・・・」

ク「・・・ご愁傷様です」

タ「ほんと最悪だよ・・・あ、でも現実のクロ（友達）には会えない！（要するにモデルというか。何度もいうけど性格は違うんじゃないかな？）さあ、次回予告です！二回目の遺跡攻略！今度はどんなわなや敵が待ち受けているのか・・・お楽しみに！！」

第四話 闇の宝石と闇の片鱗と闇のテスト

ナワエside

「ナワエちゃんなんでここが遺跡やってわかったんや?」

「い、いえ・・・前にここにいたときから『禁断の扉』として有名でしたから」

「七不思議みたいなもんなんですね」

「クロ、七不思議って何よ」

そんな感じの会話をしながら遺跡の道を進んでいく。

少し前まではクロくんのことヒスイちゃんのことアン先生のことも何にも知らなかったのに、今では一緒にいると安心する。

クースネダ校にいたときでは得られなかった感情だ。

ただ・・・

「おい、なんかおかしくないか?」

「そーやな・・・遺跡なのに魔物どころかトラップもあらへん・・・
下手するともう攻略されてるんじゃないか?」

「確かにな。ずっと一本道だしよ・・・今まで私が攻略してきた遺跡でこんなのはなかったぜ」

「あ、アレスさん！なんか出口っぽいとこ見えましたよ！」

クロくんが指を指す方向を見ると少し開けた空間が見えた。

あそこにいくとトラップがあるのかもしれない。

そうになると・・・また守ってもらう立場だ。

今私が信じている仲間はみんな強い人たちばかりだ。

私もフィナゼルさんの魂を受け継ぐ魔法使いらしいけど全然実感がわかない。

だって魔法もろくに使えないのに・・・

部屋に入ると部屋の中央に黒々と光る大きな物体があった。

そこには闇の宝石があっさりとあった。

「・・・え？もう遺跡攻略終わりっすか？」

「いや、まだ何かあるかもな・・・とりあえずワシが宝石とってくるわ」

アレスが宝石に近づき、それを手に取る。

・・・

・
・
・
・
何も起きない。

「とりあえず罨はなさそうだな。で、なんでアレスはクロみたいに
なんねえんだよ」

「ああ、先に主が宝石からいろいろ受け取らなきゃいけないのよ。アレス、ナワエに渡しなさい」

「ヒスイ、ちゃんと年上には敬語をううお!？」

クロくんがヒスイちゃんにけられるのとアレスが私に宝石を投げる
ときが一緒だった。

なんか久しぶりにヒスイちゃんにやられるクロくんを見た気がします。

闇の宝石を受け取り、見つめる。

黒々としたそれは確かに「闇」なのだが、決していやな気分になるものではなかった。

むしろ安心するような……

そこで激しいめまいに襲われた。

グルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグル

グルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグルグル

たくさんさんの記憶が思い出が見たものたくさんフィナゼルが旅して誰かに会って仲間になって一緒に戦って・・・・・・

そして何かと

戦い 繰り広げ 怖い何 か

戦い 来る ま ほうは
使える

さいきよ 無

「ナワエちゃん!!!!!!」

気がつくとアレスに支えられていた。

いつのまにか倒れていたようだ。

「どないした？気分悪いん？」

「い、いえ……一気に頭に情報が入ってきたので……二、こ、

混乱して」

でもこれは……

「ねえナワエ、何か魔法のことわかった？」

何もわからなかった。

フィナゼル（たぶん）が見たもの経験したことの情報は一気に頭に入ってきたが音声がまったくなかった。

要するに映像だけ。視覚から得られるもの以外は何もわからない。

「やつぱり……フィナゼルの使ってた魔法くらい使えたっていいじゃない」

「え？使えないのか？てつきり使えるんだぞげふっ！」

「あたしだってそうおもったわよ。でも『使うべきときになればおのずとわかる』なんてことが頭に……あゝもう！イライラするわね！」

「あ、アレスさん。次、ど、どうぞ」

アレスに闇の宝石を手渡す。

これでアレスも闇の力を使えるようになるはず。

『こんにちわ。闇の片鱗とその仲間たちですね？』

アレス side

いつのまにかマジシャンみたいな格好をした男の人が立っていた。

シルクハットとマント、両方とも漆黒で彩られている。

マント、というよりは魔法使いの衣装に近いのか？

「・・・だれや」

『私の名前はトコヤミ。初代片鱗、つまりあなたの前に片鱗だった男です。さっそくですがテストを開始しますね』

「片鱗！？テスト！？どういうことやおい！」

『ああ、いつときますけど私はもう死んでいますよ。フィナゼルの魔法でこうやって魂の一部をここに留めているだけです。ちなみに必要最低限の記憶以外はないので何も話せませんよ。ではテスト開始です』

トコヤミがそういうと部屋から真っ黒な人^{っぽい}がたくさん出てきた。

かなりの数いる。

「なんや、これ全滅させろっちゅうことかいな？」

『ええ、しかしペナルティー付です・・・えい！』

「んなつ、体が!？」

「動けねえ・・・・・・」

トコヤミの合図に合わせて自分以外のメンバーの体の自由を奪われる。

『条件はたったの2つ。1、主・・・まあお仲間もいるみたいです。彼女らを守りながら、2、黒い人たちを同時に全滅させる。ただそれだけです。闇の力を使ってがんばってくださいね』

そして仲間の命をかけた闇の片鱗のテストが始まった・・・

第四話 闇の宝石と闇の片鱗と闇のテスト（後書き）

タ「こんにちわ、タクミンです。今日は軽く近況報告できなことをします。・・・あ！今回のゲストはこの兄妹です！」

龍「久しぶり、天音龍也だ」

夢「同じく天音夢羽です・・・タクミンさんひどいです。たくさんだしてくれるっていったのに・・・」

タ「ごめんごめん。土下座するから泣かないで!？」

夢「な、泣いてはいないですよ!？」

龍「タクミンにはプライドがないのか？」

タ「まあそれはおいといて、近況報告！部活は文芸部と演劇部に入りました!!」

龍「ほう、兼部したのか？」

タ「うん！最初は文芸部だけのつもりだったんだけど、週一しかないって聞いてさ・・・演劇部勧誘されたし、興味あったし、おもしろそうでやりがいのあるような部活だったからがんばってみようかとwww」

夢「がんばってくださいね、タクミンさん」

タ「あ、それと連載休止のお知らせ」

龍「なんだ？もう受験期か？」

タ「いや、もうすぐ定期考査でさ・・・今日二週間前だから（確か）来週は無理かな」と。テスト終わったらまた書き始めるからすぐです^^」

夢「が、がんばってくださいね？」

タ「そんな気の毒そうな顔で見ないで！？怖くなっちゃうジャン！？・・・まあいいや。次回予告です^^突如始まった闇のテスト。アレスは闇の力を駆使し、仲間を守ることができるのか？お楽しみに！！」

龍「マジではやく出番来ないかなあ・・・」

夢「きつとすぐにだしてくれますよ・・・きつと」

第五話 想像と闇魔法と創造（前書き）

テストおわりますた！！^^

第五話 想像と闇魔法と創造

クロside

アレスさんが常闇を大きく振り回しながらまるでゾンビのように群がってくる『黒い人』（見た目から命名）を斬りつける。

『黒い人』は一発で割れた風船のような音を出しながら消えていった。

がすぐにまた黒い何かが集まり『黒い人』が復活する。

『それではキリがありませんよ。ちゃんとこの影たちを同時にしとめなければこのテストは終われません』

「わかつとるわそないなこと！」

アレスさんが俺たちに近づく『黒い人』は今のところ全てすぐに倒してくれる。

でも1つ不可解なことがある。

「・・・なんでアレスさん闇の力を使わないんだ？」

アレスさんはさっき闇の宝玉から力を返してもらったはずだ。

しかしアレスさんは常闇という大鎌、つまり武器でしか戦っていないのだ。

想像したとおりの魔法を使える、という片鱗本来の戦い方をしてい

ない。

まさか宝玉が偽物だったのか？とも思ってたがすぐに否定する。

ナワエ先輩のあの様子、そしてこのテストからしてあれが偽者だとは到底思えない。

「確かにそーだな。てめえのときはすぐに炎使えたのによ・・・おい、クロ。おめーあの時どうやって炎出した？」

「単純に火炎放射みたいなのをイメージしただけです。具体的にイメージすれば魔法は出せるはずなんすよ。あの時は前見た『スネークファイア』を・・・あ!？」

もしかして・・・アレスさん・・・

「何よ、なんか思いついたんなら早くいいなさいよ」

「魔法をイメージできないんじゃないのか？」

アレスside

内心、あせっている。

せつかく強大な力を手に入れたのにまったく使いこなせない。

理由は簡単。闇魔法が想像できないからだ。

今までに闇魔法をほとんど見たことがない。

魔法使いとの戦闘は前にも言ったとおりシルフが初めてだし、学校

でも闇の授業はとっていない。

闇魔法はけっこう危険な魔法なので授業をとる生徒は多くない。

それに闇魔法には「呪い」「祟り」などの目に見えないような魔法ばかりだ。

クロのときのようにうまく魔法を出すことができないのだ。

こつも参考にする人がおらんとのこと・・・クロくんは属性がまるで違う片鱗やからね・・・

『黒い人』（さつきクロくんがそう呼んどった）を倒しながら小さな違和感を覚える。

そして気づく。もう一人参考にできる片鱗がいたことに。

さつき『黒い人』を影と呼んだ人物がいる。

あいつは自分の先輩、そして同じ属性の片鱗。

そうやったらあのトコヤミの術を参考にしてやればいいだけの話なんや。

そして一度立ち止まる。落ち着いて力を想像するために。

「この鎌、リーチもつと伸びたらええのに、のお!!」

そういつて常闇を大きく真横に振る。

その刀身は金属のそれでない、真っ黒な『影』で覆い隠されていた。さらにその影が大きく伸び、眼前にいた『黒い人』たちを一気になぎ払う。

仲間たちが捕らえられている中央から歓喜の声が上がる。

『影鎌』かけがま 文字通りに常闇を伸縮自由な影の鎌に強化する技だ。

だが、それだけではまだ足りないようだった。

ナワエちゃんやクロくんたちがいるのは中央。なので今想像した『影鎌』ではどうがんばってもフィールドの半分しかリーチが届かない。

一気に全てを倒すには中央から常闇を振り回さなければいけない。

「せっかく考えついたんにな・・・どないしょ自分？」

「アレス君、君にアドバイスをします！！」

振り向くとクルムーン先生が大声で叫んでいた。

「というかあのおっちゃん今まで空気だったのに。」

「いいですか、基本的に闇魔法には今のよう大胆な攻撃はできません。影を操るなんてかなり高度ですし、他の属性と比べて圧倒的に攻撃力が低いのです。だから『力』ではなく『技術』で戦いなさい！」

おお、あのおっちゃんちゃんとつれてきてよかったわ

「おおきに！今の忠告を考慮してもっぺん考えてみるわ！」

そして考える。

派手な力を振るわず、一気に敵を殲滅する技を。

「・・・『影の舞踊』シャードダンス」

自分の影を揺らめかせる。ゆらゆらゆらと。

まるで影が躍っているかのように。

そして一気に部屋全体に影を広げて敵全員を射程範囲にいれる。

ザクッ！！

まるで包丁で野菜を切ったときのようないい音を鳴らし、大きな針のようなゆらゆらした陰が『黒い人』たち全員を突き刺す。そして・

パンッッッ！！！！！！

それらがいつせいにはじけとんだ。

もう復活してくる気配はない。ということは・・・

『テスト合格です、アレス。あなたが片鱗だということを認めましたよ』

第五話 想像と闇魔法と創造（後書き）

タ「どうも、タクミンでつす！！前回に引き続き、今回も天音兄妹にでももらいましょー^^」

龍「お、またか。最近出番多いな」

夢「まああとがきで、だけですけどね」

タ「（だってさ、天音兄弟ってなんか書きやすいもんw）そういやこの前ガッコから帰ってきて駅降りたらさ、急に話しかけられたんだよ」

龍「タクミン、ナンパしたのか？ダメだろ、顔が残念なのに」

タ「声かけられたつつつてるだろ！する勇氣すらねえよナンパなんて！！」

夢「え、じゃあナンパ、されたんですか・・・？」

龍「タクミンが逆ナンされるわけじゃないじゃないか」

タ「なんか扱いひどくね？・・・まあいいや。それが三年ぶりにあった友達でさ、けっこうびくりしてかなりうれしくて^^」

夢「よかったですね、タクミンさん」

タ「うん、顔見たらすぐに思い出せたwwまあそれはされおきそろそろ次回予告しようかな」

龍「今お前絶対めんどくさくなっただろ」

タ「・・・気のせいじゃないかな！！さて次回予告です！！今回は戦います！予定では！まあ大きく進展します！ではお楽しみに・・・」

龍「しつかりやれ・・・ってもうどつかいっちゃったぞ・・・」

夢「じゃあ私がちゃんとしたのやりますね。えと・・・無事テストに合格したアレス。遺跡から帰るとき彼らは驚愕の物を発見し、ク口は予想もしていなかった者に出会う・・・次回もお楽しみに」

第六話 遺跡と工場とかこのなかの鳥

アレスside

『テスト合格です、アレス。あなたが片鱗だということを認めましょう』

その声と同時に仲間たちの呪縛が解かれる。

まあなんとかうまくいったというべきか。

「お、おめでとうアレス」

「すごいッスねアレスさん！」

「ん、おおきに・・・それよりトコヤミ、いろいろ聞きたいことが・・・」

ゴゴゴゴゴゴゴッ！！！！！

わしの言葉は遺跡が崩れゆく音にかき消されてしまった。

「は、はやく逃げましょう！！」

「この感じからずっとすぐ壊れるぞこー！てめえら急げ！っておい！アレス！！！」

シルフちゃんの忠告を無視し、トコヤミに駆け寄る。

今まで何も知らなかった。

自分にこんな魔法を仕える力であるなんて。

だが今は大きな手がかりが近くにいるのだ。片鱗そのものが。

知りたかった。

なぜ自分たちはこの世界に召喚されたのか。

きつとこのチャンスを逃せば次はない。

そう思うととてもじゃないが逃げる気にはなれなかった。

ドーン！！

目の前に大きな瓦礫が落ちてくる。

とつさのことで常闇を出す余裕もなかった。

（あきらめられるかい！！）

必死に手を伸ばすがその手は虚しく空をきり、何もつかむことができなかった。

同時に地面にも亀裂が走る。まるでアレスの落胆を表すかのように。

「教えてくれ！自分らは何をすればええんや？トコヤミッ！！」

悪あがきとして、無駄なことだとわかっていても叫んだ。心のそこから叫んだ。

「あな　．．．．．ンクロ　．．．．．るように　．．．
．．．．．まずはおなた　．．．んを　．．．とか　．．．
．．．」

深い闇に落ちていく前にトコヤミが何かをいつていた気がした．．．
．．．

クロス　i　d　e

「いててて．．．．」

左足に鈍い痛みを感じながらゆっくりと起き上がる。

まあこのくらいならすぐに治るだろう。

あたりを見渡すと瓦礫の山だった。

「ちょ、ちよつと！！早くおろしなさいよ！！」

俺の両手の中ではヒスイがそういつてジタバタしている。

ポカポカとヒスイの拳があたるがそこまで痛くない。

得意のけりも「お姫様だっこ」をされているヒスイは出すことができない。

「ゴメンゴメン、でもこーしねーとヒスイ死んでたかもしれないぜ？」

「う、うっさい！いいからおーろーせー！！！」

いい加減うるさいので優しくおろしてやる。

けりが来るかと身構えた俺だったが、ヒスイは顔を真っ赤にして背中を向けてしまった。

・・・けっこう恥ずかしかったみたいだ。

なんかそついうのを見てしまうとこっちまで恥ずかしくなってきた。
しまう。

・・・空気重めえー・・・

「おーい、クロくん、ヒスイちゃん！大丈夫なんか？」

「・・・い、いくか」

「そそ、そうね、うん。いくわよ」

アレスさん、ナイスタイミング！

全員無事なのを確認してからとりあえず通路っぽいところを歩くことにした。

なんとか外に出ればいいのだが、入ってきたところから考えるとおそらくまだ城の中心部に近いのだろう。

たいまつで薄暗く照らされているからまったく使われていない、というわけではないのだろう。

人に会うとかなり危ないのでみんな黙っている。

いつまでも同じ通路が続くんじゃないか？と思ったが少し先に開けたところがあるようだった。

小走りでその部屋に向かう。

そこにあっしたのは……………

「なんやコレ……………」

「あのかの、ゴーレム……………」

そこにあっしたのはベルフレム校の遺跡で戦ったときと同じ、木のゴーレムだった。

しかもあのかのときみたいに壊れかけ、上半身しかないのと違い、全身

が20メートルはあろうかという巨体だった。

それが三体も……

まるで工場のような場所だった。

日本のように機械こそないもののそういう印象を受ける。

あとから遅れてきたアン先生やクルムーン先生も息をのむ。

「アレスさん、これ絶対やばいッスよね……今のうちに壊しておきますか？」

「いや、それはやめなさい。まだこれが戦争に使われると決まったわけではない。それに私たちは留学生としてここに来ている。そんなことしたら確実に犯罪人となってしまう。許可出来ない」

これはアレスさんではなくクルムーン先生の言葉だ。

確かにこれを壊す必要性はない。

今回の目的はあくまで闇の宝石の入手。

それが達成されている以上、下手に動かないほうがいい。

「しゃーない。これは見んかったことにして先進もか」

アレスさんに促されみんなが再び歩き出す。

俺も一緒に行こうとおもったのだが左足がいたんでガクツとなる。

そこで俺は見てしまった。

さっき立っただけでは見えなかった部屋。

そこには牢屋に入れられた女の子がいた。

純白のドレスをまとい、貴金属もつけてお姫様のようなが、あきらかに疲労している。

それも問題なのだが、俺が気にしたのはそこじゃない。

その女の子の髪の色は今までずっとそばで見てきた。

俺は見つけた
- - - - -
- - - - -

第六話 遺跡と工場とかこのなかの鳥（後書き）

タ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ク「おい、タクミンどうした？」

タ「いや、いろいろ疲れてさ・・・・・・・・なんかもつやる気でねえ・・・・・・・・」

ヒ「なにいつてんのよ！！いいからもつとがんばりなさい！！」
タ「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ク「ダメだ、本格的に疲れてるぞこいつ」

ヒ「じゃあ何かこのバ力が喜ぶことしなさいよ！」

ク「ん？これ読んでくれって？なにになに・・・・・・・・」

ヒ「タクミンは感想を欲しがっていますーそんなにおもしろくないのかもしれないけど、無の片鱗を読んでる読者様のためにも（棒読み）」

ク「・・・・・・・・まあこんなやつだけど感想は書いてやってみてくれないか？wたぶんそれがすごく元気とかになると思うんだ」

ヒ「ま、一言でもいいから書いてくれるとうれしいわね」

タ「・・・・・・・・・・・・・・・・うん」

ク「まあとりあえず次回予告しようか。突如目の前に転がり込んできた旅の目的。ク口は夢羽を助け出すことができるのか？お楽しみに！！感想も待ってまゝす^^」

第七話 博士と魔王と龍騎士の正体

クロス side

「クロッ!?」

無意識のうちに走り出した俺を止めるヒスイの声も耳に入らない。

ただただ、ずっと探していたものに駆け寄りたくて。救いたくて。抱きしめたくて。

その存在がとらわれている。かごに入れられた鳥のように輝きを失っている。

急に目の前に現われた誰かにも気を止めず一直線に走る。

「『呪縛』」

その誰かの声によって体が急停止する。

そうとうのスピードを出していたために体に反動が帰ってすごい痛みが襲ってきた。

がそんなことはどうでもいい。

誰だ。俺を止めたのは!!

「ここにこられてしまったんですね・・・ダメですよ、留学生君。落第点です」

「はっ、だが威勢のいいやつは嫌いじゃないぜ？お前もそう思うだろ龍騎士」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の前には三人人がいた。

俺に魔法をかけたのはおそらくあの白衣を着た眼鏡だろう。

化学の先生のような見た目だが全身から狂気がにじみ出ている。

真ん中にいるのが魔王みたいな格好をしている。

黒いボアコート（？）を羽織り、威厳を放っている。おそらくこの中でのリーダーなのだろう。

そして龍騎士と呼ばれた男。

全身が龍を催した鎧で覆われている。とげとげしい装備だ。

頭には龍の仮面がかぶられていて素顔が見えない。

ただ一瞬でわかった。

こいつが一番強いと。

「・・・どけよ、そこ」

「ハッ、やだねって言っただら？」

「突き飛ばしてでも通る！！焔っ！！」

左足に走る鈍痛も無視して焔を右手に走り出す。

対してリーダー格のヤツも杖を構えるが・・・

「こんなヤツにイナス王が手を下す必要はありません。俺が行きます」

龍騎士が代わりに前に出る。

少し冷静になった俺は立ち止まって間合いを取る。

いつでも斬り込めるし、斬り込まれてもおかしくない状態だ。

空気が凍り、緊張が走る。

視界の端にアレスさんがこっちに向かってくるのが見えたが助力を頼む余裕さえない。

勝負は一瞬・・・・・・・・

しかし次の瞬間には龍騎士の姿がおれの前から消えていた。

「クロくんっ！左！！」

「くっ！」

アレスさんの言葉に反応し、龍騎士の姿を確認もしないまま自分の左側をなぎ払う。

龍騎士を視界で捕らえてからだと間に合わないと思ったからだ。

結果、俺と龍騎士はお互いに一撃を喰らわせ、連撃を加えることなく距離をとった。

俺は左のわき腹を少し深く斬られ、俺の一撃は龍騎士の仮面を破壊してみたかった。

本当なら今すぐにも戦闘が再開されるはずだった。

しかしそうはならない。

俺の中には1つの疑念が生まれていた。

さっき龍騎士が消えた。

いつのまにか視界からいなくなり、反応が遅れてしまった。

だが俺はこれにすごく似た、いや、まったく同じと言ってもいいかもしれない技を知っている。

神経を極限まで集中させて、相手がまばたきをした一瞬の隙に相手の視界から外れて不意を突く。

人間である限り、絶対に攻略できない奇襲技。

その名も……天音流剣術奥義其ノ壱『刹那』

龍騎士の素顔が見え、俺は確信した。

「なんでそっちにいるんすか、龍騎士・・・いや、龍也さん」

天音流剣術の奥義を全て極めた俺の兄弟子がなぜか『龍騎士』として敵対していた・・・

第七話 博士と魔王と龍騎士の正体（後書き）

タ「ふう〜、疲れたぜい・・・」

ヒ「あんたいつもそんなこと言ってない？いい加減高校には慣れなさいよね」

タ「そうはいつでもさ・・・また明日も学校だ・・・」

ヒ「あくもう、イライラすんわね!!」

タ「いたっ!・・・今日は文芸部で出す予定のやつを書くのでこのへんで!」

ヒ「まったく・・・んじゃあ次回予告!探していた人が敵だった・・・クロは必死に夢羽を助けようとするが・・・お楽しみに!!」

第八話 怒りと最善の一手と魔王（前書き）

遅くなつてすみません！！

で・・・ごめんなさいですけど今日はあとがきは割愛します（汗）

ク「なんか最近あとがきがおざなりになってきているような・・・」
タ「気のせいだよ気のせい！！」

・・・ごめんなさい（泣）

第八話 怒りと最善の一手と魔王

クロス side

心のどこかで思ってた。

もしかしたら龍也さんも俺と同じように戦っているのかもしれないと。

しかしまさかそれが敵、しかも自分の妹を閉じ込めている奴らの仲間だとは思わなかった。

「どういうことだって聞いてんでしようが！！答えてくださいよお
お！！」

「クロくん！ちょっと落ち着きい！」

「邪魔すんな！そこに！目の前に夢羽がいるんだ！！」

同時に焰を顕現させ一気に炎も出す。

全身を赤々とした炎が包んでいくのがわかる。

しかしその炎は今の俺の気持ちを表しているかのように轟々と燃え上がっていた。

「おおおおおりやああああ！！！！」

焰を横になぎ払い特大の炎を出す。

アレスさんのようにちゃんと想像して創りだした技ではないが最大質量の炎の塊だ。

三人のうち誰に当たったかを確認することなく一気に走り出す。

だが体はまたもや何かに縛られたような感覚に襲われる。

それもさっきの魔法とは違い、力ずくで破ることができない。

それをよく見ると影だった。

「ええ加減にせえよクロくん。さすがにオイタが過ぎるで？」

俺を捕らえたのはアレスさんだった。

その言葉と同時に首の後ろに衝撃が走り、目の前が暗くなっていった・・・

アレス side

もう興奮したクロくんを止めるには片鱗の力を使っしかなかった。

もつとも一度クロくんが攻撃をしているため無意味だったのかもしれないのだが。

「堪忍な、クロくん」

クロくんの炎による煙も消えてきて視界が晴れてくる。

そこには無傷の三人が立っていた。

「危ないですね・・・だが単調な攻撃だ。ちゃんと防御魔法をかけてやれば何と言うことはないんですよ」

「ハッ、せつかくの力も何も考えてなきや意味がねーな」

何かはわからないのだが魔法を唱えてクロくんの攻撃を防いだようだ。

おそらくあの白衣の男が。

しかしいくら考えなしに打ったものとはいえ、片鱗の攻撃を無効化するなんて只者ではない。

あのシルフでさえ片鱗の前では全力を出してようやく互角になったというのに。

「・・・ワレ、何者や？」

「私の名前はエミール。博士、とでもお呼びください。まあ本当の二つ名は別にあります・・・」

そこにナワエちゃんたちが回り道をして階段から降りてきた。

人数的にはこちらが有利。しかしここは相手の本境地。罠がある可能性も否めない。

それに実力でみればあちらが圧倒的に上だし、しかも下手をすると戦争を起こしかねない状態だ。

よってこれらより導き出される最善の行動は……

「みんな！逃げるで！！」

いったん逃げて体制を整えてからもう一度クロくんの大切な人を助けに来る、というのが最善だろう。

クロくんを眠らせてしまった今、勝ち目は非常に薄くなってしまった。（まあ自分のせいなのだが）

それにたとえ戦争にまで発展しなくても絶対に自分たちは王族を攻撃した『犯罪者』となってしまう。

ここにはまだヒスイ、ナワエ、クルムーン先生がいる。

いくらなんでもそこまで巻き込むわけにはいかない。

しかしなぜかクルムーン先生だけはその場から動こうとしなかった。

「おい！クルムーン先生、何やつとんねん！」

「あ、ああ……すまないね」「まさか、あなたはクルムーンなのか？」

先生と博士はほぼ同時に自分の言葉に反応した。

先生は苦い笑いを。博士は獲物を見つけたような残酷な笑い。

なんや？先生とこいつに何の関係があるんや……？

「いいです。気にしないでください。行きましょう」

「そうか……残念だがあなたとの死闘はまた今度にいたしましょう……親愛なる魔王よ」

魔王という単語がいやに耳に残ったがただひたすらと逃げた。

肩に担いだクロくんの頬にはいくつもの涙が流れたあとがあった。

第九話 暗闇と女王と犯罪者（前書き）

おそくなりました!!

あ、今回もちよつとあとがきは割愛させていただきます!

ク「お前ネタがないだけだろ・・・」

そんなことはない!

ではどうぞ^^・・・あ、感想はいつでも受け付けていますからね

^^

あれはもうつとうれしいです^^

第九話 暗闇と女王と犯罪者

クロside

終わりのない暗闇。

そのなかにたった一人たたずむ少女、天音夢羽。

彼女を見つけた途端俺は走り出した。

必死に手を伸ばし、彼女のか細い手を取ろうとする。

しかしその手は誰かに斬り落とされてしまい、夢羽には届かなかった。

俺の手を斬ったヤツが仮面をとり素顔をさらす。

そこには・・・天音夢羽の兄、そして俺の中でもっとも強くかついい青年、天音龍也が残酷に笑っていた・・・

「うわああああ！！！！」

大きな声をあげながら俺は飛び起きた。

息は荒く、呼吸をするのも困難だった。

すこし落ち着いてから周りを見渡すとそこは俺の主人、ヒスイ・エクスセラの部屋で俺はベッドで寝ていた。

「……………どういうことだ？」

俺はアレスさんたちと一緒にクースネダ校に行つて闇の宝石を手に入れてそれで……………

まさか全て夢だったというのか？

いや、それはない。あの記憶は間違いなく現実のものだ。

「あ……………起きた？」

「ヒスイ！なんでここに帰つてるんだ俺は！夢羽は！龍也さんは！」

心配そうな顔で帰ってきたヒスイに詰め寄り思うがままに疑問を伝える。

「ちょ、いたい、いたい！！」

「なあ！龍騎士は！！俺は戦える！絶対に夢羽を助けるから！！！！」

「ええ加減にしとき」

いつのまにか部屋にいたアレスさんに突き飛ばされる。

冷静なアレスさんをみて無性に腹が立った。

「邪魔しないでください！早く助けにいかないといけないんですよ！もう二度と大切なものは失いたくない・・・そのために今すぐにも夢羽を救いにいかないと！！いてもたってもいられないんですよ俺は！」

「クロくん、とりあえず落ち着き」

「そんな余裕ありませんよ！アレスさんは何も失ったことがないからそんな平気なんだ！俺の失いたくないと思うこの気持ち！アンタにわかるのかよ！！」

「ホンマええ加減にせえ。こんな余裕のない非常事態やからこそ冷静にならなあかんやろ。ただ闇雲に助けようとしても自滅するで。それどころか他の大切なものまで失くしてまう。せやからまずは落ちつき」

「・・・・・・・・」

「クロくんの家族のことは聞いた。確かにワシにはクロくんのような経験はしとらん。けどワシにやって失いたくないもんはたくさんあるんや。クロくんやってワシの大切な仲間や。そんなクロくんが苦しんでて平気なわけがないやろ」

「・・・・・・・・ごめんなさい」

「ま、なんや。とりあえずあの闇の国にあったゴーレムのことは報告しにいかんあかんからのお。一緒に来い」

そういえばそうだ。

夢羽たちのこともあるがそつちも一大事である。

死にかけでも俺たちが苦戦したあのゴーレム。

あれがもし戦闘に使われるなんてことがあれば・・・

「そうツスよね・・・学園長のところに行くんすか？」

「いや、違うで。今から会いに行くんはこの国の女王、アオイ姫や」

アレス side

長いロングの金髪。気品のある顔立ち。凜とした雰囲気をもし出し、いかにも上に立つのにふさわしい人間。

それがベルフレム王国女王、アオイ・エクセラの印象だった。

そして魔力も相当あるように見えた。

闇の力を手に入れてからなんとなくだが相手の魔力がわかるようになったのだ。

クースネダ校でのことの一部始終は全てクルムーン先生が話した。

ただ「魔王」の単語が出てきたとき一瞬先生が恐怖の表情を浮かべたのが気にはなったが・・・

「そうですか・・・では至急魔法連合軍に相談してみましょう。それからまたあなたたちに知らせます」

「・・・それってどのくらいかかりますか・・・」

小さく、しかしはつきりとした声で聞いたのはクロくんだった。

「そうですね・・・まず調査団が結成されて調査し、その後軍が作戦をたてて・・・」

「そんなに待てませんっ！！！」

「ちよつとクロ！」

ヒスイが止めるもクロくんの勢いはまったく止まらない。

「俺は！いますぐにでも夢羽を助けに行きたいんだ！こんなところで足踏みするわけにはいかない！！もう夢羽は手の届く範囲にいますんだ！！」

アオイ女王は困ったような表情を浮かべてる。

でもクロくんの望みをかなえる方法がないわけではないのだ。

たった一つだけある。

が、それは同時にクロくんを排除せねばならない状況でもある。

「ヒスイ、あなたはいいの？」

アオイ女王にとってその選択は娘のヒスイ・エクセラに危険を与えるものだ。

しかしヒスイは何も迷わずにその唯一の方法を提案した。

「お母様、私はこの魂獣と共に国を裏切る犯罪者になります」

もうしわけございません(前書き)

重大な発表です・・・

はじめとしていっておかなくては、と思ひまして

もうしわけございません

こんにちわ、タクミンです

さて、今回は重大な発表です・・・というかタイトルのところでみなさんだいたい気づいていらっしゃるとおもうんですけどね（泣）

そうです、まことに申し訳ないのですが「無の片鱗」の連載を無期間で休載させていただきますm（――）m
高校生になり、勉強との両立もうまくできず、それに部活とかにももっと本腰を入れていきたいためです。

正直時間がとれずにこれが重荷になってしまっていたことも事実ですし、作者がそんな状態では読者が楽しめるはずがありません・・・

それに文章力がなさすぎなのも理由のひとつです。

僕としては自分の小説をもっともっというんな人に見てもらいたいです。

なのでもう一度書き直したり、じっくりと何度も推敲をもっとおもしろい「無の片鱗」を読んでいただきたいのです

今まで楽しみにしてくださった方々、こんな中途半端なところで終わらせてしまい、本当にもうしわけございません。

でも僕は必ず大学に受かったら・・・つまり1年と半月で帰ってきます！！

もし僕のことを覚えてくださったらそのときはまてぜひ読んでいただけるとうれしいです^^

ではみなさん、今までありがとうございました。

たまに短編とかは出していくつもりなので、これからもよろしくおねがいします・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2145n/>

無の片鱗

2011年8月2日00時39分発行